ISSN 1882-7136

京都外国語大学大学院紀要

言語と文化

第14号

March 2020

Language and Culture

研究論文

外国人児童日本語支援員の振り返りにおける
自己エスノグラフィー活用の検討 …… 新谷　遥

中国語独特の“来”の用い方及び日本語訳の特徴の考察 …… 賀　喜

中国語の“X不起”の用い方及び日本語訳の特徴の考察 …… 付　汝青

「恵まれる」構文の特異性 …… 馮　一峰

中国語の【V_1+个+不/没+V_2】の用い方の特徴に関する考察 …… 吉野 孝介

日本語の会話における否定的評価について …… 向　蕊

京都外国語大学

言語と文化

第14号　　2020年3月

目　次

研究論文

外国人児童日本語支援員の振り返りにおける
自己エスノグラフィー活用の検討…… 新谷　遥　1

中国語独特の“来”の用い方及び日本語訳の特徴の考察…… 賀　喜　15

中国語の“X不起”の用い方及び日本語訳の特徴の考察 …… 付　汝青　29

「恵まれる」構文の特異性…… 馮　一峰　43

中国語の【V_1＋个＋不／没＋V_2】の用い方の特徴に関する考察…… 吉野 孝介　53

日本語の会話における否定的評価について…… 向　蕊　65

編集後記 …… 75

Language and Culture

Vol. 14 March 2020

CONTENTS

Articles

Auto-Ethnographical Research of a Japanese Language Support Staff for Children…Haruka Nitani 1

How to use the unique “coming”in Chinese and feature of Japanese translation……Xi He 15

A study on the use of Chinese “X不起” sentence structure
and the characteristics of Japanese translation ……Ruqing Fu 29

The Idiosyncrasy of Megumareru Construction in Japanese ……Yifeng Feng 43

Considerations on the usage characteristics of Chinese【V_1+个+不/没+V_2】…… Kosuke Yoshino 53

Negative expression about transmit information and pragmatic function
in Japanese Conversation …… Rui Xiang 65

Editor’s postscript …… 75

外国人児童日本語支援員の振り返りにおける自己エスノグラフィー活用の検討

新谷　遥

要　旨

本稿では、全国で増加傾向にある外国人児童生徒の学びを支える「日本語支援員」の振り返りのプロセスを提案する。筆者自身の外国人児童に関する過去の記録を活用して自己エスノグラフィーを作成し、求められる資質・能力から点検を行うという振り返りの事例を考察した結果、今後目指す実践の策定を行うための振り返りを行えることが示唆された。

1．はじめに

全国で増加傾向にある外国人児童生徒に対する学校現場の支援において、「日本語支援員」の存在は欠かせないものとなっている。本稿で言及する「日本語支援員」（以下、支援員）について明確に定義したものは管見の限り見当たらないが、文部科学省（2014）では、特別の教育課程としての日本語指導実施にあたり、主たる指導者とともに「指導補助者として、地域の方や日本語指導の専門性を持つ外部の方の協力を得ることは大いに考えられる」としており、文化庁（2018）でも、学校の管理下で外部人材としての学校における日本語支援員が外国人児童生徒の対応をしている現状を報告している。

このように、支援員が学校現場の日本語指導にとってなくてはならない存在となりつつある現状がうかがえる。そこで本稿では、外国人児童生徒支援において大切な役割を担う支援員を対象とし、支援員が自分のビリーフや課題を把握してよりよい実践につなげるための振り返りのプロセスを考察する。

2．先行研究

本稿における支援員と同義の「外国籍児童生徒の学習支援市民ボランティア支援員」に関するものとして松井（2018）があり、岐阜県瑞穂市の小中学校に勤務する支援員６名に対し、「応募動機」、「支援内容」、「使用言語」、「担当教師や学校との話し合いの有無」、「悩み」などについてインタビュー調査を行っている。松井の報告からは、支援員が様々に試行錯誤して外国人児童生徒に対して支援を行っている様子がうかがえるが、なかでも「どの支援員たちの口からも、『自分は今のままでよいのか』という不安が多く聞かれた」とい

う点に注目した。支援員は、「誰からも何も言われない」環境にあり、「支援員たちが状況を観察し、彼らの判断で支援の方法を考えている状態である」という。また、同市では、「支援員は有償ボランティアであり、個人で研修を受け研鑽を積む立場である」という見解をもっていた（pp.7–8）。

では、支援員が自ら「自分は今のままでよいのか」という問いの答えを見つけるためには、どうすればよいのだろうか。日本語教師が「私はどのような教室をめざすのか」という問いに対して実践の振り返りを行うことについて、「実践研究」という立場から述べたものに細川（2005）があり、「実践研究」を「教師自身が自分の実践を内省的に振り返りつつ、その意味を確認し、他者とのインターアクションを積極的に受け入れ、より高次の自己表現を目指そうとする活動である」（p.10）と定義している。また、日本語指導が必要な児童生徒に関わる現職教員のビリーフの変容と教師の成長に関するものには浜田・齋藤（2018）があり、教員の経験がビリーフに与える影響と振り返りの重要性について述べている。浜田・齋藤は、「教師の個人的経験として年代、海外居住経験、職業的経験として、日本語教育・指導に関する研修の受講経験、外国人児童生徒への日本語指導の経験、勤務地域での経験」が日本語指導の必要な子どもの教育に関するビリーフに影響を与え得るとした。

以上の点から、本稿では支援員がよりよい実践を目指すためには、「振り返り」と「経験」が重要であると考えた。そこで、支援員がまずは自分でできることとして、自分の過去の記録を活用して経験を整理し、過去から現在に至るまでのビリーフの変容を考察する自己エスノグラフィーを作成することが、支援員の実践を振り返る方法とならないかと考えた（自己エスノグラフィーについては 4–2で詳述）。本稿では、振り返りにおける時系列を明確にするために、「振り返りを行う時点」を「現在」とし、「振り返りを行う時点より以前の足跡」を「過去」とする。なお、日本語教育とは分野が異なるが、人材育成研究における自己エスノグラフィーの可能性について論じたものに伊藤（2015）がある。

さらに、こういった振り返りを行ったとき、単なる支援員の経験の振り返りにならずに目指す実践をよりよいものにするためには、どのようにすればよいだろうか。「よりよい実践」はもちろん、子どもによって変わる。だからこそ、子どもを巡って担任教師や保護者とコミュニケーションをとることは欠かせない。しかし、支援員は外部人材として学校のシステムの外にいるため、担任教師や保護者と十分な話し合いの時間をとったり、校内研修などに出て学校現場の様子を把握したりすることも難しく、求められていることが見えにくい。そこで、日本語教育学会（2019）が示した「外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力モデル『求められる具体的な力』（2019年７月版）」（以下、資質・能力）に注目した（資質・能力については 4–3で詳述）。この資質・能力は、外国人児童生徒等教育に実際に関わる多様な関係者 20名へのインタビュー調査から作成されており、客観的なエッセンスとして振り返りに組み込むことで、「支援員が求められていること」の概要が可視化できると考えたためである。なお、この資質・能力策定のためのインタビュー調査に

は、筆者も支援員の立場で調査協力を行った。このインタビューを受けたことにより、筆者は多角的に自身の実践を振り返ることとなり、「自分自身が目指す実践」と「周りから何を求められているか」を考えるようになった。関係者20名の詳細なインタビュー内容については、日本語教育学会（2018）を参照されたい。

3．研究の目的

本研究では、筆者の過去の記録を用いた実践の振り返りのプロセスを事例とし、日本語支援員が自身の実践をよりよいものにするための振り返りの提案を行うことを目的とする。本稿では、過去の記録を活用した自己エスノグラフィーと求められる資質・能力の２点から振り返りを行う。

4．支援員の振り返りの概要

4-1. 振り返りの流れ

本稿における振り返りは、以下の流れで行う。

⑴ 自分が実践において目指してきたことの整理
過去の記録や想起されたことを時系列に並べ、当時の自身のビリーフを振り返る。本稿では、これを「自己エスノグラフィー」（4-2で詳述）として扱う。

⑵ 求められていることの点検
自己エスノグラフィーに対して、日本語教育学会（2019）「外国人児童生徒等教育を担う教員の資質･能力モデル『求められる具体的な力』（2019年７月版）」（4-3で詳述）を参照できるマトリックスを作成し、自己評価を行う。

4-2. 自己エスノグラフィー

エリス・ボクナー（2006）は、「自己エスノグラフィー」について、以下のように定義している。「自己エスノグラフィーとは、ジャンル的には自叙伝的な記述とそれをとおした研究に属し、個人と文化を結び付ける重層的な意識のあり様を開示するものである」（p.135）。また、エリス・ボクナーは「自己エスノグラフィー的テクスト」について、「通常一人称で書かれて、さまざまな形式をとる」とし、短編小説、詩、種々の創作、長編小説、フォト・エッセイ、随筆、日誌、アンソロジー、社会学的散文などを挙げている（p.136）。これらの「自己エスノグラフィー的テクスト」は、振り返り時点より以前のことについて想起して語る「想起による個人的語り」（p.139）と呼ばれる。

一方で、人間の記憶は有限であるため、何の手がかりもなしに自己エスノグラフィーを作成することは困難である。そこで、過去の記録を参照すれば経験を芋づる式に想起し、自身がどういった考えをもって子どもの日本語教育に関わってきたのか振り返ることに役立つと考えた。では、支援員が振り返りのために自己エスノグラフィーを作成するには、どういった過去の記録が活用できるだろうか。一般的に支援員が産出していると考えられるものとして、大学の授業のレポート、指導に関するメモ、活動日誌などが挙げられる。講演会のアンケートに書く感想なども、写真を撮っておけば過去の記録となり得るであろう。また、これらの記録はそれ自体が実践を振り返って書かれた「想起による個人的語り」であり、自己エスノグラフィーの一部として活用できるといえる。

さらに、この自己エスノグラフィーには、浜田・齋藤（2018）が「現場での体験とその振り返りを複層的に関連させつつ、たえず意識的、批判的に自身のものの見方に対する問い返しを行っていくことが重要である」（p.71）と指摘するように、経験を振り返るだけでなく、そのときにどう考えていたかを現在の自分から振り返ることが必要であると考え、ビリーフを書き加えることとする。なお、本稿におけるビリーフの定義は、浜田・齋藤の「子どもの第二言語習得や認知発達、異文化適応、日本語の指導法等に関して教師がもつ意見」（p.62）とした。

4-3. 日本語教育学会（2019）「外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力モデル『求められる具体的な力』（2019 年 7 月版）」

日本語教育学会（2019）の資質・能力は、前述のとおり多様な関係者から作成された客観性をもつ指標である（表１）。日本語教育学会によると、これらの４つの力の関係は、「捉える力」「育む力」「つなぐ力」が相互に関わりながら実践を動かし、「変える／変わる力」がそれを推し進めるという関係で、４つの力が絡まり合いながら成長し実を結ぶ「豆の木」のようなイメージであるという。また、日本語教育学会は教員・支援員の経験についても言及し、以下のように述べている。

> 教員・支援員は、それぞれの教育や支援の経験、多様な言語文化との接触体験等の経験と、人間性やコミュニケーション力などを土台に、外国人児童生徒等教育の資質・能力を発達させる。木の生長は根の生長と共にあり、外国人児童生徒等教育に携わる経験は、教師として、また、支援者としての成長をも促すと考えられる。（日本語教育学会 2019:3）

このことからも、資質・能力と、支援員の経験からなる自己エスノグラフィーとの対応を支援員の振り返りに組み込むことは、支援員の成長にとって意義のあることであると考えた。

表１　日本語教育学会（2019）「外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力モデル『求められる具体的な力』（2019 年 7 月版）」

捉える力	子どもの実態の把握	〈文化間移動と発達の視点から、外国人児童生徒等の状況を把握することができる。〉	子どもの心理的状況を文化間移動等の視点から多角的に把握することができる。
			日本語と母語の両方を視野に入れ、ことばの力を見取ることができる。
			子どもが困難に直面しているシグナルを見逃さず、その背後にある家庭・学校・地域の状況を理解することができる。
	社会的背景の理解	〈外国人児童生徒等の背景や将来を、社会的、歴史的文脈に位置付けることができる。〉	移動や家庭の状況を、社会のグローバル化や歴史に関連付けて理解することができる。
			子どもの暮らしを、地域の多文化化の状況に関連付けて把握することができる。
			子どものライフコースを、今後の社会と共に展望することができる。
育む力	日本語・教科の力の育成	〈児童生徒の実態等を踏まえて、日本語・教科の教育を行うことができる。〉	外国人児童生徒等教育に関する制度や状況を理解した上で指導ができる。
			子どもの学校内外の生活に関連付けて日本語指導ができる。
			子どもの第二言語習得や教育方法に関する知識をもとに、日本語指導ができる。
			日本語に関する知識を生かして、日本語、および教科の指導ができる。
			子どものニーズや能力に合わせて、日本語と教科を統合した指導ができる。
			特別の教育課程としての日本語指導の計画を作成し、実施することができる。
			指導に必要な教材を選択したり、作成したりすることができる。
	異文化間能力の涵養	〈外国人児童生徒等と周囲の子どもとの相互作用を通して、双方に異文化間能力を育てることができる。〉	子どもが新しい環境に適応することを支援できる。
			外国人児童生徒等の言語的文化的多様性を周囲の子どもの学びに結びつけることができる。
			子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重して学級経営ができる。
			文化間移動の経験を価値づけて、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。
			人権教育、持続可能な開発のための教育、地球市民教育等と関連づけて指導を行うことができる
つなぐ力	学校づくり	〈関連する組織や人々と連携して、よりよい学習環境を整備することができる。〉	外国人児童生徒等教育を学校の教育課題に位置づけ、学校全体で取り組むよう働きかけることができる（スクール･カウンセラー、スクール･ソーシャルワーカーを含む）。
			コミュニケーションの仕方等を工夫して保護者との信頼関係を築き、学校の教育活動への参加を促すことができる。
			地域の支援活動団体等、学校外の様々な関係者と連携し、支援体制を構築することができる。
	地域づくり	〈異なる立場の人々と協働しながら、学習環境としての地域づくりをすることができる。〉	学校が拠点となり、地域の様々な関係者と連携して、子どもの学習環境を豊かにすることができる。
			外国人児童生徒等教育に関する社会的関心を高めるために、自身の取り組みを広く発信することができる。
変える／変わる力	共生社会の実現	〈社会的正義と公正性を意識し、多文化共生を具現化することができる。〉	外国人児童生徒等のマイノリティーの立場を理解し、公正性を意識した指導・支援ができる。
			マジョリティ側に、外国人児童生徒が地域にもたらす影響を多様性として肯定的に捉えられるように働きかけることができる。
			子どもが多様性を資源に活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
	教師としての成長	〈外国人児童生徒等に関する教育・支援活動を振り返り、自己の成長につなげることができる〉	外国人児童生徒等の教育を通して、自身のものの見方を批判的に問い直すことができる。
			子どもの言語や文化に興味をもち、自身と異なる言語・文化に価値を見いだすことができる。
			実践の質を向上させるために、研修会に参加する等の学習の機会を求めることができる。
			外国人児童生徒等教育の経験を、自己の教師としての成長として意味づけることができる。

日本語教育学会（2019）の資質・能力は、表１のように、大中小分類から成る。「捉える力」という１つの大分類は、２つの中分類と６つの小分類から成る。「育む力」という１つの大分類は、２つの中分類と12の小分類から成る。「つなぐ力」という１つの大分類は、２つの中分類と５つの小分類から成る。「変える／変わる力」という１つの大分類は、２つの中分類と７つの小分類から成る。30の小分類は日本語教育学会（2019）では「求められる具体的な力」としているが、本稿ではこれらの４つの力とその小・中分類をあわせて「資質・能力」と呼ぶ。

本稿では、支援員の振り返りが単なる経験の振り返りにならないよう、自己エスノグラフィーに対して資質・能力の自己評価を行う。自己エスノグラフィーと資質・能力の振り返りの例を簡易版として示したものが図１と図２である。この例では支援員として活動する大学生と社会人を想定し、左に時系列に自己エスノグラフィー（過去の記録・語り・ビリーフ）を配置し、右に資質・能力の４つの力とその中分類を配置して簡易版の振り返りを作成した。資質・能力の自己評価は１から３（１：できない、２：どちらでもない、３：できる）とし、振り返りを行っている時点を★で示している。

	自己エスノグラフィー	捉える力		育む力		つなぐ力		変える／変わる力	
		子どもの実態の把握	社会的背景の理解	日本語・教科の力の育成	異文化間能力の涵養	学校づくり	地域づくり	共生社会の実現	教師としての成長
大学１年	小学校教員養成課程で学ぶ。教科指導や学級経営は大変そうだ。	1	1	1	1	1	1	1	1
大学２年	スクールサポーターとして外国人児童の支援に関わる。日本語を教えるのは難しい。	1	1	1	1	1	1	1	2
大学３年	外国人児童生徒の教育に関する授業を受けて理論がわかる。子どもの気持ちに寄り添いたい。	2	2	1	1	1	1	2	2
大学４年★	教育実習に参加した。学校では色々な人と連携しなければならない。	2	2	2	2	2	1	2	3

図１．大学生支援員の振り返り例

	自己エスノグラフィー	捉える力		育む力		つなぐ力		変える／変わる力	
		子どもの実態の把握	社会的背景の理解	日本語・教科の力の育成	異文化間能力の涵養	学校づくり	地域づくり	共生社会の実現	教師としての成長
支援１年目	子どもの母語が話せるからと支援員を頼まれた。主に母語を使って支援をする。	2	2	1	2	1	1	1	1
支援２年目	子どもの学年が上がり、引き続き支援をする。日本語を教える方法が知りたい。	3	2	2	2	2	1	2	2
支援３年目	地域の日本語教室でもボランティアを始めた。色々な立場で子どもを支援している人がいることに気づいた。	3	3	3	3	2	2	3	3
支援４年目★	保護者との通訳を頼まれた。保護者と初めてきちんと話して、保護者支援も必要だと感じる。	3	2	3	3	2	3	2	3

図２．社会人支援員の振り返り例

なお、ここで自己評価を行うのは、資質・能力との対応を見ることが、あくまでも支援員の「求められていることの見えにくさ」を解消する目的であるためである。つまり自分が行ってきた問題解決や、過去から現在に至るまで自分に起こった変化が、客観的に求められていることにどの程度合致できているか「点検する」ための自己評価であり、様々な経験を積むことにより、この自己評価はときには３から２になったり、また２から３になったりと、変化していくものであると考えている。

5. 振り返りの事例の分析と考察

5-1. 対象となる支援員（筆者）の経歴

本稿では、筆者自身の日本語指導の実践の振り返りを分析対象事例とした。

筆者は、奈良県の公立小学校において日本語指導を行って４年目となる日本語支援員である。大学で日本語教員養成課程を主専攻で卒業した後、教材編集者として「成人に対する日本語教育」を中心に日本語教育に関わっていたが、表２のような経験を経て子どもの日本語教育の現場に足を踏み入れた。

表２　筆者の経歴

年	主な区分	概要	居住地
2005 ｜ 2009	大学学部時代	日本語教育主専攻	京都府
2009 ｜ 2013	編集者時代	日本語教材編集	東京都
2013 ｜ 2015	アメリカ小・高TA時代	J-LEAPプログラム参加	メリーランド州 コネチカット州
2015 ｜ 現在	日本語支援員時代	支援者ネットワーク設立 教員養成系大学院生 日本語教育系大学院生	奈良県

この振り返りは、筆者自身の小学校での入り込み指導において、「私は実践において何を目指してきて、現在何を大切にしているか」を明らかにしたいと考えたところからスタートしている。

5-2. 筆者が行った振り返りの手順

筆者の実践の振り返りは、4-1で示した振り返りの流れに従い、5-2-1と 5-2-2の手順で Microsoft Excel を用いて行った。

5-2-1. 自分が実践において目指してきたことの整理

（1a）筆者が日本語教育を学び始めてから振り返りを行う時点までの過去15年分の記録や、振り返り時点から想起されたことを時系列に並べた。筆者は過去の記録として、大学の教員養成課程のレポート、就職時の応募書類、支援者ネットワークの活動報告書、研修の記録、メモといった資料から子どもの日本語教育に関連すると思われる部分を活用し、補足説明がいるものは「想起による個人的語り」（以下、語り）として積極的に書き込んだ。また、子どもの日本語教育においては、外国人集住地域や散在地域などの「居住地」が何らかの影響を与えると考え、居住地の項目を追加した。

（1b）（1a）当時の自身のビリーフを振り返って書き込んだ。この振り返りでは、（1a）と（1b）を「自己エスノグラフィー」として扱った。

5-2-2. 求められていることの点検

（2a）自己エスノグラフィーに対して、日本語教育学会（2019）「外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力モデル『求められる具体的な力』（2019年７月版）」を参照できるマトリックスを作成し、自己評価を行った。筆者の振り返りの場合、期間が15年と長いことと、資質・能力の30の下位区分に対して自己評価を行ったため、１から３の自己評価スケールでは不十分であった。そのため、１から５の自己評価とした（１：全くそう思わない、２：あまりそう思わない、３：どちらでもない、４：そう思う、５：非常にそう思う）。資質・能力の発達を可視化するため、Microsoft Excel 上で１が無色、５が最も濃い色となるように設定した。

（2b）自己評価が上がる・下がる・変化がない部分に注目し、経験からもたらされた気づきや資質・能力が変化しない要因を考察することで、実践において自分ができることや、求められているができていないことを明らかにする。

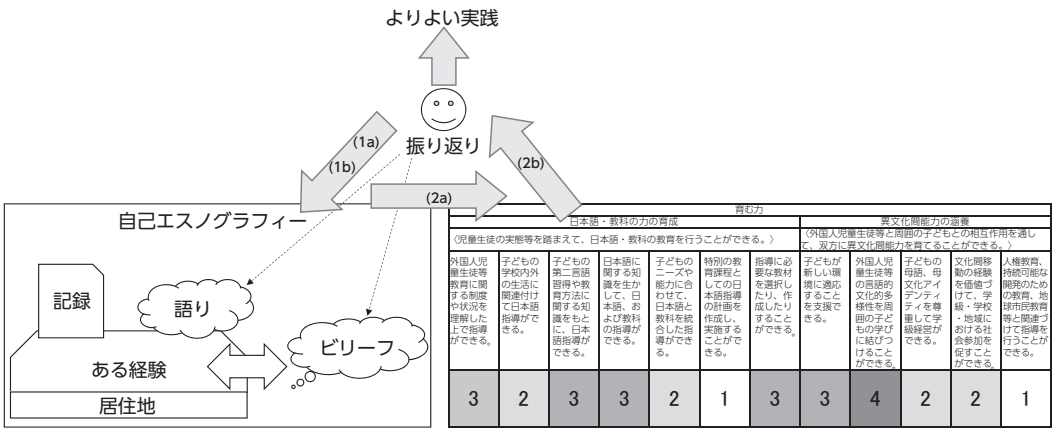


図３　筆者の振り返りのプロセス（育む力の例）

筆者の振り返りのプロセスを示したものが図３である。(1a)(1b)(2a)(2b)の番号は上記の手順に対応している。

筆者が実際に行った振り返りが図４である。(1a)(1b)(2a)(2b)の番号は上記の手順に対応している。

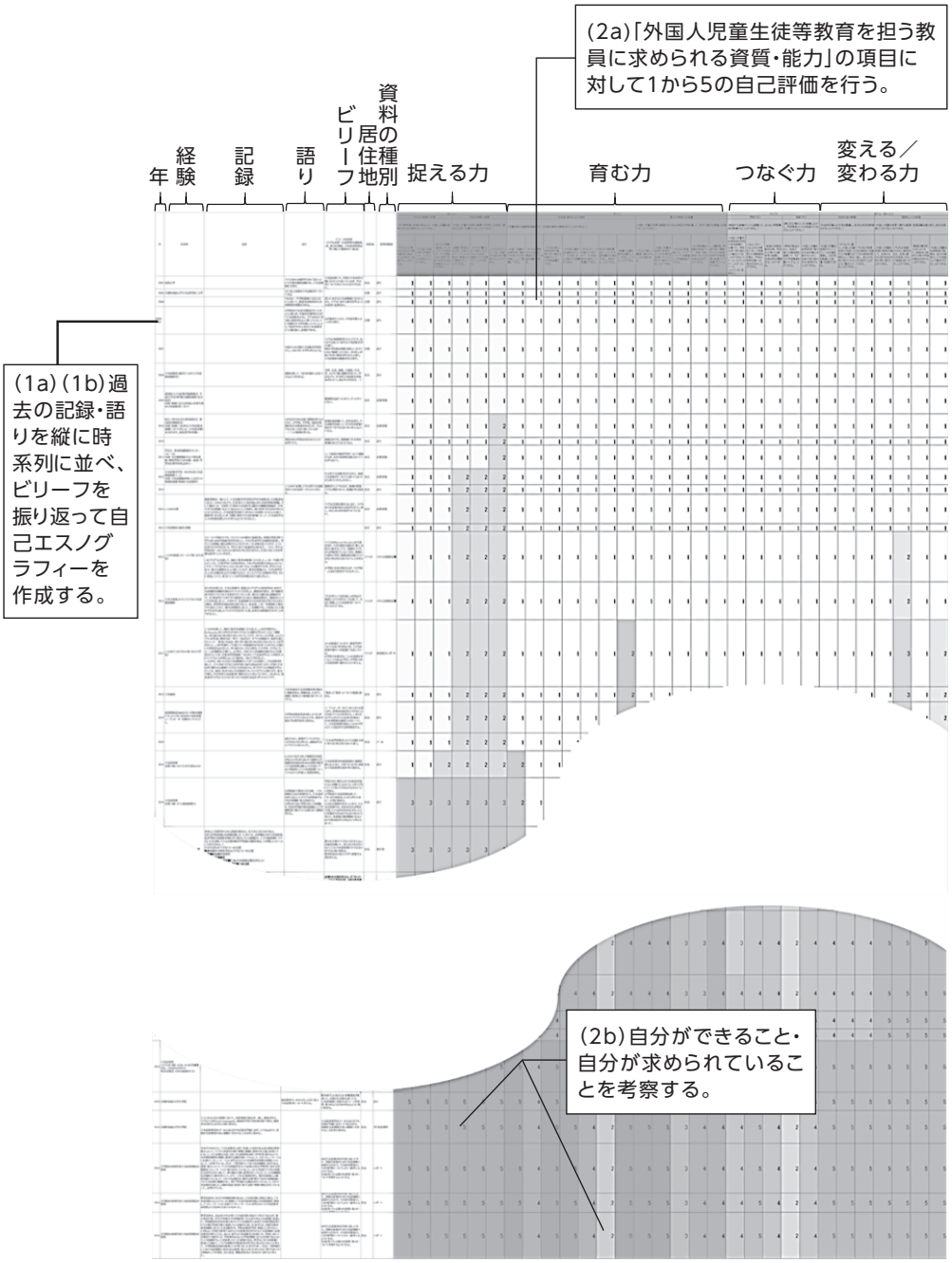


図４　筆者の自己エスノグラフィーと資質・能力による振り返り

次節で筆者の自己エスノグラフィーと資質・能力の発達に関して、詳しい分析を行う。

5-3. 筆者の振り返りにおける４つの力の発達に関する考察

筆者の振り返りを事例とし、資質・能力の４つの力がどのように発達していったかを自己エスノグラフィーと対応させ、時系列で考察する。以下の四角の枠内は、自己エスノグラフィーからの抜粋である。〈　〉の最初の３つの「年、主な区分、概要」は、表２と対応している。また、最後の「資料の種別」は、図４のように自己エスノグラフィーに記入したものを示している。

5-3-1. 捉える力の考察

筆者は、捉える力が４つの力のうち最も早く発達している。筆者が子どもの日本語教育に強い関心を持ったとき、研修を通して、外国人児童生徒が多い地域の課題が顕著な事例に触れていたことがわかった。

> 東京の外国人が比較的集住する地域に行き、小学校、中学校、高校の先生が参加する研修会に参加する。外国人児童生徒の学習、進路などについて現場の先生方からの質疑が止まらず、「なんでみんなこんなに困っているのだろう」と衝撃を受ける。
>
> 〈2010年、編集者時代、日本語教材編集、語り〉

一方で、筆者の大学時代にも、「小学校の日本語支援員に興味を持ち、京都のある地域の支援員の説明会に参加した」という語りがあった。しかし、このときは成人日本語教育についてのみ学んでおり、「心の面のケアよりも日本語を教えることが大切だ」と、日本語教育のスキルに関するビリーフのほうが強く、心の面のケアについては打ち消されることになり、結果的に外国人児童生徒に対する支援への興味関心も消失している。

5-3-2. つなぐ力の考察

筆者は2016年に奈良県の外国人児童生徒の支援者ネットワークを立ち上げているが、ここで自主夜間中学、地域日本語教室、公立学校など、様々な立場で子どもを支援する人々と協働したことにより、「様々な立場で子どもたちを支える人の意見を聞いて、考えなければならないことは日本語指導だけではないのではと思い始める」とビリーフに変化があった。

参加した支援者から出た課題や意見は、以下のようなものである。
- 多忙な学校現場との連携の難しさ。（これには、非常勤などの日本語指導員が学校との連絡が取れずに孤立している問題や、土日や放課後に子どもたちを支援している支援団体が学校側と連絡を取ることが難しいといったことが含まれる。）
- 日本生まれの子どもたちへの支援
- 特別支援の可能性がある子どもたちへの支援
- 心の面の支援の重要性
- 母語支援の重要性
- 日本語指導や特別支援についての研修の機会がほしい
- 外国にルーツを持つ未就学児童への支援
- 教育委員会など行政との連携

〈2016年、日本語支援員時代、支援者ネットワーク設立、報告書〉

また、地域の関係者とネットワークができたことで、自身の支援がスムーズになったことも、つなぐ力が発達した要因であるといえる。

5-3-3. 変える／変わる力の考察

筆者は社会人になってから小学校の教員免許を取得したが、日本語指導を行いながら小学校教員養成課程の授業を受けたことに対して、以下のような自己エスノグラフィーが見られた。

現場にいることで授業で学ぶ理論と実践を往還することができ、入り込み指導から担任としての資質・能力を体験的に学んでいく。

〈2017年、日本語支援員時代、教員養成系大学院生、語り〉

単なる言語習得の面からだけでなく、子どもの認知発達の面からも支援の可能性を考えていきたい。

〈2017年、日本語支援員時代、教員養成系大学院生、児童心理学の授業でのレポート〉

このとき、小学校教員養成課程の授業において担任教師の多様な資質・能力について学び、「担任教師が求められている多様な資質・能力について知り、『担任の先生ってすごい』と思うようになる」、「免許を資格くらいに思っていたが、子どもの成長を目の当たりにし、子ども理解や教科学習のスキルを身につけたいと考えるようになる」と日本語教育に関す

る内容が中心であったビリーフに、担任教師からの視点が追加することになる。実践に新たな視点が加わったことで、自らの実践をより批判的に問い直す力が発達している。この小学校教員養成課程における経験が「担任教師との協働において、自分は日本語指導者として何を目指すか」ということを改めて考えるきっかけとなったことがうかがえる。

5-3-4. 育む力の考察

育む力では「日本語・教科の力の育成」、「異文化間能力の涵養」が求められている。筆者の場合は、成人日本語教育→海外における年少者日本語教育→国内における年少者日本語教育→学校教育→国内における年少者日本語教育と、ビリーフの観点が変容してきた。この振り返りを行った時点では、日本語教育系の大学院において再び日本語学や日本語教育について学んでいる。筆者が在籍する大学院には日本語学校、就労者支援、海外の日本語教育機関など、多様な現場や経験をもつ大学院生が学んでいる。

> 受講者の現場は多様であるが、それぞれの日本語教師（または日本語教師を目指す人）は、共通認識のもとに模擬授業を分析したり、自身の授業の振り返りを行っており、同じような日本語教育に関するビリーフをもっているように見えた。
> 〈2019年、日本語支援員時代、日本語教育系大学院生、日本語指導法に関する授業のレポート〉

この経験は、筆者が再び日本語教師の資質・能力について考え、子どもの日本語の力をどう把握し、支援につなげていくかを模索する機会となった。このため、大学院の課程を修了する頃にまた自己評価を行えば、育む力に対する自己評価はまた変わっているであろうと推察している。

5-4. 筆者の振り返りでみられた要因となり得る経験と要因になりにくい経験

筆者の振り返りでは、４つの力の発達すべてに関係する経験は、「日本語支援員として実際に子どもに関わったこと」であった。以下は、初めて小学校において日本語指導を担当したときの語りである。

> 日本語がわからないことで子どもが直面する不安や困難に私も直面する。学校文化に慣れるまでは母語が話せる人が隣にいるということが子どもにとってどれだけ安心することかを知る。
> 〈2015年、日本語支援員時代、支援者ネットワーク設立、語り〉

筆者は前述のように、大学学部時代、主に成人日本語教育について学ぶ中で、「心の面のケアよりも日本語を教えることが大切だ」というビリーフをもっていた。しかし、小学

校で日本語がわからない児童と実際に関わってみて、「学校文化に慣れるまでは母語が話せる人が隣にいるということが子どもにとってどれだけ安心か」ということを理解することとなる。

一方で、筆者の振り返りからは、大学学部時代に子どもに対する日本語教育が身近ではなかったときに経験した研修、海外における年少者日本語教育の経験や、居住地による４つの力の大きな発達は見られず、直接４つの力を伸ばす要因とは言いにくいという結果となった。

5-5. 筆者の振り返りで見られた育ちにくい資質・能力

筆者の振り返りでは、自己エスノグラフィーに対して資質・能力の30の小分類について自己評価を行ったことで、支援員という立場からは育ちにくい個別の資質・能力があることがわかった。それは「育む力」の「特別の教育課程としての日本語指導の計画を作成し、実施することができる」と「子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重して学級経営ができる」、「つなぐ力」の「学校が拠点となり、地域の様々な関係者と連携して、子どもの学習環境を豊かにすることができる」という資質・能力である。いずれも筆者が支援員という外部人材であり、制度上主体的に課題を動かしていく力を持たないことに起因すると考えられる。しかし、こういった資質・能力を支援員が知っておくことが客観的に求められているのは事実であるので、今後筆者自身がこの点に気をつけながら実践を行っていく必要があることが明らかになった。

6．おわりに

本稿では、筆者の過去の記録を活用した自己エスノグラフィーと求められる資質・能力の２点を並べて実践を振り返るプロセスを示し、日本語支援員が自身の実践をよりよいものにするための振り返りの提案を行った。その結果、自身が実践において目指してきたことを整理し、求められていることを点検しながら、今後目指す実践の策定を行うための振り返りを行えることが示唆された。

なお、５章で述べた考察は、あくまでも筆者の振り返りの考察であるので、支援員の資質・能力の発達などが必ずこの通りでなければならないということを示すものではない。本稿では振り返りのプロセスを示すまでを考察の範囲としたが、自己エスノグラフィーや振り返りは本来、一人で行うことがゴールではない。多様な経験をもつ支援員同士が振り返りの結果を持ち寄って交流し、よりよい実践について話し合う機会をもつまでが本研究のデザインである。交流への展開については、今後の課題としたい。

謝辞

奈良教育大学の和泉元千春先生、渋谷真樹先生は、筆者の実践をいつも温かく見守り、ご助言をくださいました。心より感謝いたします。そして、熱心に指導してくださった京都外国語大学の森篤嗣先生に、深謝の意を表します。

引用文献

伊藤精男（2015）「人材育成研究における『自己エスノグラフィー』の可能性」『九州産業大学経営学論集』25（4）, 25–43.

エリス , キャロン . ボクナー , アーサー（2006）「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編『質的研究ハンドブック３巻　質的研究資料の収集と解釈』北大路書房 , 129-164.

日本語教育学会（2018）「平成 29年度文部科学省委託『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業』報告書」https://mo-mo-pro.com/report（2019年 11月 6日閲覧）

日本語教育学会（2019）「文部科学省委託『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業』2019年 7月改訂版資質・能力モデル」https://mo-mo-pro.com/report（2019年 7月 27日閲覧）

浜田麻里・齋藤ひろみ（2018）「日本語指導が必要な子どもに関する現職教員のビリーフ――影響を与える経験に着目して――」『子どもの日本語教育研究』1, 61–75.

文化庁（2018）「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/__icsFiles/afieldfile/2018/06/19/a1401908_03.pdf（2019年 10月 24日閲覧）

細川英雄（2005）「実践研究とは何か――『私はどのような教室をめざすのか』という問い」『日本語教育』126, 4–14.

松井かおり（2018）「海外にルーツがある子ども達の教育における市民サポーターの役割――瑞穂市外国人児童生徒支援員の支援方法に焦点をあてて――」『朝日大学一般教育紀要』43, 1–10.

文部科学省（2014）「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）Q&A 指導者」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1341929.htm（2019年 10月 15日閲覧）

中国語独特の“来”の用い方及び日本語訳の特徴の考察

賀　喜

要　旨

说到中文的“来”，最先想到的是作为趋向移动动词。可是，“我来做”“慢慢来”“来一个”等句子中的“来”的用法却与移动无关，而且将其翻译成日语时也会有很多无法用「来る」来表示的情况。本文共三个小节，分别列举出了“我来做”、“慢慢来”、“来一个”这种中文中独特的“来”的用法，并通过例句将这些用法的特点进行考察，分析出使用场景，说话人的意图，相互有无共同点等等，以及分析出日语的译法以及翻译的特点。

はじめに

中国語における“我来做”、“慢慢来”、“来一瓶啤酒”というような“来”は日本語の「来る」に対応せず、中国語独特“来”の用い方である。本稿では中国語の“来”は直示的移動動詞として用いられている他に、どのような独特の用い方をもつのか、それらをどのように日本語訳にするのかについて考察する。

第１節　“我来”の“来”の用い方の特徴

中国語における“我来做…”“我来说…”のような用い方及びその日本語訳の特徴について二つの項に分け、考察することとする。

１．１　中国語の“我来”と日本語の「私がする」

中国語の“我来接你”からは少なくとも二つの意味が読み取れる。

○我来接你。（私があなたを迎えに行く。）[1)]
○我来接你。（あなたを迎えに行くことを私に任せる。）

前後の文脈によって異なる意味が生じる。前者の“来”は日本語の「が」に相当し、後者

1）例文の出所は下記の通りである。Weblio日中辞書〈https://cjjc.weblio.jp/〉、用例.jp〈http://yourei.jp/〉、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言〈www.kotonoha.gr.jp/shonagon/〉、BCC语料库〈bcc.blcu.edu.cn〉

の“来”は動詞として用いられる。ただし、日本語の言語慣習ではこの場合、「行く」と訳す。下記の例を考える。

○由你做指示，我来打下手。（あなたに指図をしてもらって、私が下働きをしましょう。）
○你歇会儿，我来替你。（あなたは少し休みなさい、私が代わってやりましょう。）
○我来实现你的愿望吧。（私があなたの夢を叶えましょう。）

上記の例を見ると、中国語における“来”には〔主語＋来＋動詞〕の形で，動詞の示す動作を積極的にそのことに取り組む姿勢を表すという用い方がある。日本語では〔主語＋が＋（目的語＋）動詞〕と対応する。

○已经没有什么好怕的了，从今往后我来保护你。（もうなにも怖くないよ。これから私が君を守るから。）
○当我刚要把信往邮筒里放进去的时候，卓玛伸出手来说：“我来放进去。”（ポストに手紙を入れるところに、卓瑪は手を出して「私が入れる」と言った。）

上記の例の共通点と言えば、いずれも「私」「あなた」の人称代名詞が登場し、本人にむかって、「あなたのため、私が何かをする」「あなたのかわりに私が何かをする」という意味を表す。この用い方において中国語の“来”は日本語の「が」に相当し、「このことは私がする」のようにほかの人ではなく、「わたしがする」という動作主を強調することになる。そして、日本語訳では目的動作が「～ましょう」のように意志形が多く用いられるという特徴も見られる。

1.2　中国語の“我来”と日本語の対応語

“我来…”には「私が～」以外の対応語も存在する。

○因为山田先生在出差，我来替他回复。（山田さんは出張中なので、代わりに私より／から返事いたします。）
○想吃什么只管买，钱我来付。（何か食べたい物があればどしどしお買いもとめください。お金は私の方で出しておきますから。）
○彼女が一人で海外旅行に行くのはさすがに心配だから、私は付き添って行くことにする。（她一个人去国外旅行太让人担心，我来陪她一起去。）

上記の例を見ると、中国語の“我来…”は日本語訳では「私から～」、「私より～」、「私の方で～」、「～ことにする」で対応する場合もある。なぜならば、「私がする」ならば、日本

語では相当、響きが強い。日本語では「私から～」、「私より～」、「私の方で～」、「～ことにする」を用いると、柔らかく聞こえるため、相手への配慮と考えられる。

一方、日本語では“我来…”を「私は～」に訳す例が見られる。

○你来摇橹，我来划桨。（君は櫓をこげ、私は櫂でかく。）

この例文には、動作主が二つあり、そして「私が～」のように主語（動作主）の“我”だけを取り立てる文ではなく、“我来…”と“你来…”の後に続く目的動作という主題を取り立てる必要がある文である。そのため、ここの“来”は日本語の「は」に対応する。

○君は櫓をこげ、私は櫂でかく。→「君」と「私」をそれぞれ取り立てている。

このように、中国語で二つの主語（動作主）を取り立てる場合は日本語訳すると二つの「は」を用いるという特徴が窺える。二つの「は」を用いることによって、平等的な立場で、相手への配慮とも受け取れる。

“我来…”の日本語訳では主語が省略される場合も多く見られる。

○下面，我来讲一讲黑板上写的这首诗。（次に、黒板に書いたこの詩について話しましょう。）
○你一个人孤孤单单的，我来陪你说说话。（一人では寂しいでしょうから、そばでおしゃべりのおつきあいをしましょう。）

上記の例を見ると、“我来…”の主語が省略される日本語訳では、「ましょう」という文末の形（目的動詞が意志形を用いる）で表現すれば、主語が省略できるという特徴が窺える。

実際に、日本語の会話では主語が省略される目的動作を表す短文は中国語の“我来…”と対応できる例が多く存在する。

○手伝います。（我来帮忙。）
○なんとかします。（我来想办法。）
○あなたの質問に答えます。（我来回答你的问题。）

また、フォーマルの場合では以下の例がある。

○あなたが手紙で指摘している問題点にお答えします。（我来回答你在信中指出的问题。）

○我々の自社サービスに関しまして、ご説明いたします。(我来说明一下关于我们公司的服务。)

上記の例から分かるように、中国語の“我来…”の日本語訳では、主語が省略されてもされなくても対応できる。これは中国語と日本語における最も大きな違いの一つであり、中国語を日本語に訳す際に、主語が省略される形で対応できることも分かる。

“我来…”の主語が省略される日本語訳は以下の例もある。

○让我来揭开这个秘密。(私にこの秘密を明らかにさせてくれ。)
○在你制作校正数据的时候，请让我来确认那个。(校正データを作成したら、確認させてください。)

以上のように、日本語の「させていただく」、あるいは「させてくださる」のような〔使役形＋謙譲語〕の形は本来、中国語の“我来…”、“让我来…”と意味的に対応しているため、〔使役形＋謙譲語〕の形で中国語の“我来…”を十分表現できる。そしてこの場合、中国語の“我来…”の前に“让”を加え、日本語と同じく自分がすることを許してほしい、あるいは積極的に何かを自分に任せるという意が含まれる。

第２節　“慢慢来”“胡来”の“来”の用い方の特徴

“放着我来”“慢慢来”“别胡来”“何必来这一套”のような“来”の用い方はいずれも日本語の「来る」で対応できずに、中国語の“来”の独特の表現と見られる。本章では、このような“来”の独特の用い方及び日本語訳の特徴について考察することとする。

2.1 中国語の“来”と日本語の「する」

まず下記の例を考える。

○她酒精过敏喝不了酒的，还是让我来吧。(彼女はお酒にアレルギーなのでお酒飲めないから、私が代わりに飲もう。)
○你去拿那个大的箱子，这个小的我来。(その大きい箱を持ってくれ、この小さいのを私が持つ。)

上記の例は前節で議論した“我来～”構文と同じなのか。前節の“我来～”は〔我＋“来”＋動詞〕構文であり、その“来”は日本語の「が」に相当するが、上記の例の“我来”は〔我＋動詞“来”〕構文で、その“来”は日本語の動詞「する」に相当するもので、完全に異なるこ

とが分かる。ただし、下記の例のように判断しにくい例も多い。

○你别帮我夹菜，我自己来。（料理を取っていただかなくてもいい。自分で取ります。）
○如果你们谁都不愿意和他交涉的话，只好我自己来了。（彼と交渉することが誰でもいやだったら、仕方なくて私自分で交渉するしかない。）

上記の“我自己来”について、“我自己来夹菜”“我自己来交涉”の省略とも考えられる。このように考えると、“我自己来”の“来”は日本語の「する」に相当するという解釈が一つであり、“我自己来夹菜”“我自己来交涉”のような文は述語動詞の省略という解釈がもう一つである。すなわち、二つの説が成り立つ。本節ではこの“来”の構文について“来”の機能、用い方について分析する。

筆者は中国語において、一定な場面で本来のある具体的な動作を表す動詞（述語動詞）を省略し、代わりに“来”を用いて文を構成する用法が存在するという説をとる。すなわち代動詞的な用い方で、“来”が文脈によっていかなる動詞の機能が果たせると解釈できる。

“她酒精过敏喝不了酒的，还是让我来吧”という構文では、“来”が“喝”の代わりに「酒を飲む」という行為を表し、本来は“还是让我喝吧”の形である。また、“你别帮我夹菜，我自己来”という文では、“来”を用いたため、後に本来言うべき述語動詞（＋目的語）の“夹菜”が省略できるようになった。

このように、“来”を用いると、複雑な述語動詞が省略でき、より簡潔な表現方法で文を構成することができる。そして、“我自己来”“慢慢来”のような省略構文が現代中国語において長く使用されていたため、日常会話のみならず、文章など様々な場面においても頻繁に使用され、すでに慣用表現となっているという立場をとる。実際に、多くの場合、“来”の後に述語動詞が本来ついてくるはずだが、省略構文が慣用表現となっているため、述語動詞が文の中で省略されているだけである。したがって、“来”と日本語の「する」は用法的に常に対応しているとは限らないと考えられる。

以上述べた内容を踏まえて、前節で議論した“我来～”構文を再度、考える。

○你去拿那个大的箱子，这个小的我来。（その大きい箱を持ってくれ、この小さいのを私が持つ。）

この例の“我来”について、前節の内容と本節で議論した“来”構文によって、三つの解釈が可能になる。

解釈①：〔我＋“来”（＋動詞）〕構文、“来”は「が」に相当し、日本語では「私が持つ」で対応する。ほかの人ではなく、「わたしが動作を行う」のように動作主を強調する機能を表す。

○你去拿那个大的箱子，这个小的我来（拿）。（その大きい箱を持ってくれ、この小さいのを私が持つ。）

解釈②：〔我＋動詞“来”〕構文、“来”は「する」に相当し、本来“这个小的我拿”の形で、具体的述語動詞の代用という機能を表す。
解釈③：〔我＋“来”（＋動詞）〕構文、“我来”は本来“我来拿”の形で、省略構文が慣用表現となっているため“拿”が省略されたのである。日本語訳では述語動詞が省略せず「私が持つ」で対応する。

上記を見ると、解釈①と解釈③はいずれも〔我＋“来”（＋動詞）〕構文であり、解釈③の内容が解釈①を補充しているとも言える。

一方、解釈②のように、“来”と「する」はいずれも代動詞の機能を持つが、「する」は広義的な代動詞であり、実際に文でそのまま使うと文が成り立たない場合がある。以下の例がそれである。

○这事只能慢慢来。→動詞の“做”を表し、広義的
・この事はゆっくりするしかない。→「動作・行為を行う」を表し、広義的
○你别帮我夹菜，我自己来。→動詞の“夹”を表し、具体的
・料理を取っていただかなくてもいい，自分でします。→広義的な動詞「する」×、具体的な動詞「取る」○

上記の例を見て分かるように、日本語ではそのまま「する」を使うことではなく、具体的な動詞を使う場合が多い。

そして、日本語において主語や助詞などが省略されることが多いという特徴をもつが、具体的述語を省略する言語現象はあまり見られない。さらに視点を変えて考えると、「する」は本来、動作・行為を行う意味を表し、日本語において最も幅広く用いられる述語動詞である。これに対して、中国語の“来”は「する」のように単なる述語動詞ではなく、文脈によって異なる意味が生じられ、果たされる機能も特定でない言葉である。これも“来”と「する」の根本的な相違点だと考えられる。

2.2 “胡来”“别来这套”のような表現の日本語訳

“胡来”“别来这套”のような慣用表現における“来”は「する」の意味と相当し、いずれも中国語独特な“来”を伴う表現である。日本語でどのように訳すかについて、本節で考察することとする。

次に“胡来”の例及びその日本語訳の特徴を考える。

○他是一个容易胡来的人。（彼は荒くれ者／暴れん坊だ。）
○不会修就别胡来。（修理の仕方がわからないのならいじくり回すな。）
○你可要谨慎，可不要由着性子胡来！（慎重にしなければ、気ままにむちゃなことをしないように！）

上記の例から見ると、“胡”は「むちゃ」「やたらに」に相当し、“来”は「する」と相当する。日本語訳では基本的に「むちゃをやる」「やたらにする」などで対応するが、文脈によって異なる対応語も変わってくることもある。また、“胡来的人”のような表現について、日本語の「荒くれ者」「暴れん坊」のような表現で対応するのも可能である。

次に“别来这套”の表現の日本語訳の特徴を考える。

○别跟我来这套！这次要堂堂正正地一决胜负。（君のそんなやり方はやめてしまえ！今度は正々堂々と勝負しよう。）
○咱们是老朋友了，何必来这一套呢。（もう古い仲間だ、そんなつまらないまねをして必要あろうか。）
○你别跟我来老一套，有什么话直截了当地说好了！（僕に紋切り型のまねはやめろ。言いたいことがあったら単刀直入に言えばいいんだ！）

上記の例において、“别来”や“少来”は「～するな」「やめろ」という意味を表し、“来”は「する」に相当する。“别来这套”は日本語訳で基本的に「こんなことやめろ」「そんなつまらないまねをやめろ」のような表現で対応し、“来”は別にはっきり訳されず、“别”とともに“别来”（「～するな」）の形で訳されるのが普通である。

第３節　“来点”“来个”の“来”の用い方の特徴

店で買い物や食事を注文する際、“来一瓶啤酒”、“来点饮料”のような表現がよく使われている。これも中国語の“来”の独特の表現の一つである。本章では、“来点”“来个”のような“来”の用い方及び日本語訳の特徴について考察することとする。

3.1　注文に関する“来”の用い方及び日本語訳

○服务员：“您想来点什么？”（店員：「ご注文はいかがなさいますか？」
客人：“先来一瓶啤酒。”お客さん：「とりあえずビールをください。」）
○服务员：“主食来什么？有米饭，饺子，面条。”（店員：「主食はいかがなさいますか？
チャーハン、餃子、ラーメンがあります。」

客人：“来一碗炒饭。”お客さん：「チャーハンでお願いします。」）

上記の例を見ると、“来点什么”“来什么”のような表現は店のスタッフが注文を伺う際に使われている。日本語では「いかがなさいますか」に訳される。そして、注文する際に“来两碗米饭”の“来”は日本語の「～をください」、「～（で）お願いします」と対応できる。ということはこの“来”は店のスタッフと客の双方が使える表現である。

○我们来点什么喝的吧。（何か飲み物でも頼みましょう。）
○饭后我想来点甜食。（食事のあとにデザートとか注文したい。）
○要不要来点水果？。（よかったら果物をどうぞ。）

上記の例において、“来点”は「～でも頼もう」「～とか注文する」の意味を表す。ここの“点”は「～でも」「～とか」に対応できる。また、“来点”は相手に飲食を勧める表現にも使われる。“要不要来点？”のような文は、直訳すると「あなたはなにか食べますか」になる。ただし、日本語の言語習慣において、このような場面では配慮表現を伴うことが多いため、「～をどうぞ」で対応することとなる。ちなみに、上記の例における“来点”は“来个”“来一个”に置き換えても用いられる。

○来荤的还是素的？（肉料理か野菜料理かどちらにしますか？）
○今天胃口不太好，来一个清淡的菜吧。（食欲があまりないから、あっさりしている料理にしましょう。）

上記の例において、“来”は日本語の「～にします」と対応し、どちらにするか決定することを表す場合にも使われる。

次に飲食に関する〔“再来”＋助数詞〕のような表現の日本語訳を考える。

○再来一碗饭。（ごはんのおかわりお願いします。）
○瓶盖上写着“再来一瓶”的话就是中奖了。（ペットボトルの裏ブタに「もう１本」の文字が入っていると当たりです。）

上記の例において、“再来…”は飲食した同じものを重ねて飲食すること、または同じものを再び頼むことを表す。“再来一碗”“再来一份”のような表現は直訳すると「もう＋助数詞＋をください」のようになるが、日本語には「おかわり」という意味的に相当する慣用表現があるため、「おかわり」と訳されると本格的な日本語になる。

また、“再来一瓶”は販売促進キャンペーンによく使われる表現だが、広く知られてい

るため、すでに慣用表現になっている。日本語に直訳すると「もう１本もらえる」になるが、上記の例のように「もう１本」と訳したほうが中国語のニュアンスに近づけると考えられる。

以上のように、“来”は注文する場面において、頻度高く用いられている。日本語訳では「～をください」「～を注文する」「～にする」「～をもらう」などの対応語がある。ただし、“来”を使って店で注文するのがよりカジュアルな用法で、インフォーマルのニュアンスが含まれることも考えられる。

○来一瓶啤酒。（ビールをください。）
○请给我一瓶啤酒。（ビールをください。／ビールをお願いします。）

上記の二つの例が同じ意味をしているが、前者は“来”を使うとくだけた表現になる。これに対して、後者は言葉遣いを変え、“来”を使わず、〔敬語＋述語動詞＋目的語〕のような完全な形を使うと丁寧文になることが見られる。

このように、本節で議論した注文に関する“来”は第２節で議論した「する」に相当する“来”と用法的に関連性を持っているとも考えられる。なぜなら、“来一瓶啤酒”という文はフォーマルに言えば“给我一瓶啤酒”になり、ここの“来”は“给我”の代用として用いられているとも言える。すなわち、本節の“来”の用い方は第２節で議論した“来”と同様に、具体的述語動詞の代用であることと解釈できる。ただし、本節の“来”の日本語訳では、対応語が動詞だけではなく、短文を用いて対応する場合もある。“来一瓶啤酒”の“来”が日本語の「～をください」で対応することがその例である。

3.2 “来个”に関する表現の用い方及び日本語訳

中国語における“来个”“来一个”“来了个”“来了一个”のような表現が様々な場面で頻繁に用いられている。ちなみに、“来个”“来了个”は“来一个”“来了一个”の省略であり、意味や用法はいずれも通じる場合が多い。このような表現は日本語でどのように訳すかを考察することとする。

○歌唱得真好，再来一个吧。（お歌が上手ですね。もう一曲を歌ってよ。）
○刚才的魔术都没看过瘾，你再给我们来一个嘛。（さっきの手品はみんな満喫していないから、もう一つやってよ。）
○我给大家来一个余兴节目。（余興をやりたいと思います。）

上記の例から見ると、“来一个”は相手に何かやってくださいという勧誘を表す表現である。また、話し手から“我…来一个”と言う場合は、誰かに見せるためにその物事を行うことを表す。また、上記の例における“来一个”もくだけた表現だと考えられる。上記

の例の丁寧な言い方を見てみよう。

○歌唱得真好，再唱一首吧。（お歌が上手ですね。もう一曲を歌ってくださいよ。）
○刚才的魔术都没看过瘾，你再给我们表演一个嘛。（さっきの手品はみんな満喫していないから、もう一つ披露してくださいよ。）
○我给大家表演一个余兴节目。（余興を披露したいと思います。）

このように、“来”を使わず、代わりに具体的述語動詞を使うと文が完全構文になり、丁寧文になる。このように、上記の例における“来一个”の“来”の用い方は第２章で議論した“来”と同様に、「する」と相当し、代動詞的な用い方であることとも言える。

“来（一）个”の他の例を考える。

○谈判一开始就采取了高压态度，企图给对方来一个下马威。（交渉が始まるとすぐに高圧的態度を取って、相手ににらみをきかせた。）
○他来我家找我，我给他来了一个闭门羹。（彼はうちに来て、私に会おうとしたんだが、玄関払いを食わせた。）
○原以为会对此事展开彻查，没想到领导直接来了一个不闻不问。（このことを突き止めると思いきや、上司は無関心で全く取り合わない態度を示すのは思わなかった。）

上記の例において、中国語の“来一个”“来了一个（過去形）”は一般的に〔“给”＋人称代名詞＋“来一个”＋述語〕という形で、相手に予想外の動作・行為・態度などを示す姿勢を強調することを表す。ここの“来”は「与える」、「示す」に意味的に近い。日本語訳では、述語動詞が使役形を用いて対応する場合があり、明らかに訳されず〔目的語＋述語動詞〕の形で意訳される場合もある。一方、上記の例における“来”を実際に省略することが可能である。ただ、“来”を使わない文は相手に何かを与えるという姿勢のインパクトが弱くなるニュアンスが生じる。

○好，让我们先来个自我介绍吧。（じゃ、まず自己紹介から始めよう。）
○她决心来个反攻。（彼女は逆襲しようと決心した。）
○他拍了拍陈生的肩膀，说：“咱哥俩儿再接着喝，今晚来个一醉方休！”（彼は陳生の肩をたたいて、「俺ら続けて飲もう！　今夜はとことん酔っ払おう！）

上記の例において、“来个”は「何かをしよう」という意味を表し、“来”は「する」に相当する。これからしようとする行為・決定などに取り込む姿勢を強調し、また、話し手の気

持ち、決意などをより強く表現する。日本語訳ではニュアンス的に意志形の「～しよう」と対応できる。ちなみに上記の例における“来个”を省略することもできる。

“来个”の他の例を見てみよう。

○事情到底解没解决，先给我来个回音。（あのことがうまく解決されているかどうか、とりあえず返事をください。）
○有空就给家里来个信，别让你妈妈总惦记你。（手が空いていたらちゃんと家に手紙をよこしてきな、お母さんを心配させないで。）

上記の例において、“来个”は日本語の「よこす」と意味的に対応する。〔“给”＋名詞＋“来”＋目的語〕の形で、通常は人・手紙・電話などをよこす場合に用いられる。日本語訳では「～をよこして」「～をしてくれる」「～をしてください」などで対応する。

○他的态度来了个180度的转变。（彼の態度はがらりと変わった。）
○不知听到了什么风声，这次的交易突然来了一个急刹车。（どんなうわさを聞きつけたのか知らないが、取引は突然中止になった。）
○没想到事情来了一个峰回路转，大家这才放心。（これについては意外にいい転機が訪れた。みんなはようやく安心した。）

上記の例において、“来了（一）个”は何かが発生したという意味を表す。日本語の「起こる」、「発生する」と意味的に対応できる。問題・事柄・事象・態度などに用いられることが多い。日本語訳は前文の例と同様に、明らかに訳されず、〔目的語＋述語動詞〕の形で意訳される。

以上の例を通じて考察した結果、本節で議論している“来（一）个”“来了（一）个”と第２節で議論した代動詞的な用い方である“来”とは共通点があると考えられる。それは、“来个”の“来”は日本語において、いかなる文脈によって、意味的に対応できる動詞が存在することが見られることである。例えば、“来一个节目”の“来”は「する」と対応できる。“来一个下马威”の“来”は「示す」と意味的に対応できる。このように考えると、“来个”の“来”は具体的述語動詞の代わりに用いられ、広義的な述語動詞「する」に相当すると言える。この結論をとるゆえに、本節の“来个”の“来”の用い方は第２節で議論した「する」に相当する代動詞的な用い方である“来”とは、一致しているところがあると考えられる。

以上議論した内容を踏まえて、“给我来”と“给他来”の“来”の用い方は同様であるかいなかを考える。

〇给我来一瓶啤酒。（ビールをください。）
〇给他来一瓶啤酒。（彼にビールをください。）

例を見ると、注文する際に、“给我来”と“给他来”の“来”は用い方や訳語が同様であることが分かる。

〇悄悄走过去给他来个措手不及。（こそこそ近づいて彼に不意を突かせる。）
〇你也要偶尔给我来个惊喜嘛。（たまにサプライズしてくれたらいいじゃないか。）
〇今天是他的生日，我们准备给他来个惊喜。（今日は彼の誕生日だから、私たちがサプライズさせようとしている。）

上記の例において、“给我来”と“给他来”の“来”は用い方が同様であることが分かる。ただ、日本語訳では、“给我来”は「～してくれる」または受身形が多用され、“给他来”の日本語訳では使役形が多用されることが見られる。

〇他给我来信了。（彼が私に手紙をよこした。）
〇小王给他来信了。（王さんが彼に手紙を送った。）
〇我给他来信了。×（私が彼に手紙を送った。）

上記の例を見ると、“来”は「よこす」を意味する場合は前項主語の人称によって用い方が限られている。他人から自分へ何かをよこす場合、または他人から他人へ働きかける場合に使える。これに対して、自分から他人へ働きかける場合は“来”が使えず、“我给他寄信”、“我给他打电话”という具体的動詞を使う。一方、日本語の「よこす」は他人から自分へ何かをよこすことに限って使える。

おわりに

第１節では、中国語の“我来～”という用い方において、日本語訳には「私が～」を含めて６つの訳し方があり、それぞれ異なる特徴を持ち、一部は日本流の対人的配慮という心理が窺えることが分かった。次に第２節では、中国語において、本来ある具体的な動作を表す動詞（述語動詞）を省略し、代わりに“来”を用いて文を構成する用法が存在することを示した。そして第３節では、“来个～”に関する“来”は中国語の文脈において、具体的述語動詞の代わりとして用いられていると言えるため、この“来”は第２節で議論した代動詞的な用い方である“来”と一致していると考えられることを明らかにした。

参考文献

『白水社中国語辞典』　伊地智善継（2002）白水社
『中国語大辞典・上』　大東文化大学中国語大辞典編纂室（1994）角川書店
『プログレッシブ中国語辞典』　武信彰（2002）小学館
『中国語　虎の巻――実力アップ15の秘伝』　彭飛（著）/ 榎本英雄（監修）（2006）東方書店

中国語の“X不起”の用い方及び日本語訳の特徴の考察

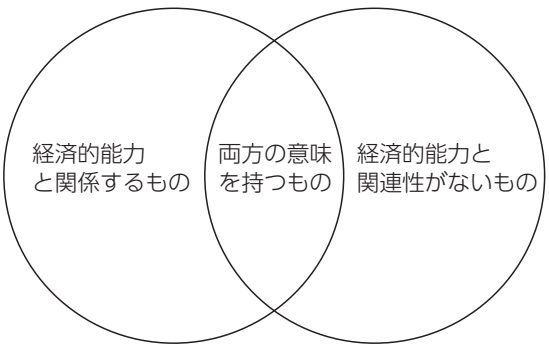
付　汝青

要　旨

本論文は中国語の“X不起”構文の用い方及び日本語訳の特徴について考察するものである。“X不起”構文を用い方や意味によって分類し、それぞれの特徴を浮き彫りにしようとするものである。本論文は、主に“X不起”構文を４つに分け、それぞれの属性と日本語における動詞可能形と対応できるかできないかについて論述する。

第１節　“X不起”構文の分類基準

“X不起”構文の用法は多くあるため、まずは経済的能力の有無を基準として以下のように分類することを試みる。



図表〈1〉経済的能力の有無による分類

上記の図のように三つの種類に大別することとする。両方の意味を持ち、文脈により意味が変わる場合もあると考えられている。本研究は「動詞＋可能補語」を中心に研究するため、“便宜不起”“胖不起”のように“便宜”“胖”など「形容詞＋可能補語」の例は本論文研究対象外としているが、ただし、“爱”“恨”など喜怒哀楽、人間の感情を表し、動詞の性格を帯びる一部の形容詞は研究対象とする。

①経済的能力と関係するもの

この類は、主に「金が足りないことからできない」と関連する表現である。この類に属

する表現は「意図的にやらない」よりも、「支払えない」という経済的な理由で「することができない」ことを表している。

“买不起”“喝不起”“用不起”“上不起”“去不起”“住不起”“送不起”“付不起”“养不起”“请不起”“抽不起”“读不起”“坐不起”“修不起”“唱不起”“飞不起”“亏不起”などの例がそれである。

この分類に属している“X不起”の例はいずれも“付不起”（支払えない）という経済的能力との関わりを表す。

②経済的能力と関連性がないもの

この類に属する表現は、主に話し手或いは主語の能力や感情（例えば“恨不起”のような人間の感情に関わる例）により「できない」という意味を表すものである。経済的能力と関連する“X不起”構文と比べれば、主観性が強いと考えられる。つまり、経済的能力と関連する“X不起”は完全に客観的なものを説明することに対し、一部経済的能力と関連性がない“X不起”構文は主観的な意味を表している。

“记不起”“提不起”“耽误不起”“恨不起”“想不起”“惹不起”“经不起”“受不起”“说不起”“躲不起”などがそれである。この分類には“伤不起”も含まれている。下記の例を考える。

○今天其实挺冷的，只穿了一件衣服真的伤不起啊。／今日は本当に寒い。一枚だけしか着ていないので本当に辛い。
○因为相对我来说，他老了，在这方面，男人的自尊是伤不起的。／だって私に比べれば彼のほうがお年寄りだ。この点から考えても男としての自尊心を傷つけられるわけにはいかない。

“伤”の従来の意味は「傷つく」、損害を受けることを表している。これに従い「傷つきたくない」「これ以上の損害を受けることができない」という意味を表している。しかしながら近年では、“伤不起”は「かわいそう」の意味をもつようになっている。「これ以上の損害を受けることができない」の意味から「これ以上の損害を受けたくない」まで、意味が拡大されている。

詳しくは本稿第３節で説明することとする。

③両方の意味を持つもの

この類に属する“X不起”構文は文脈により、「経済的能力あり」と「経済的能力と関連性がない」の両方を表すことができる意味をもつものを指す。“开不起”“看不起”“拿不起”“背不起”“丢不起”“爱不起”“玩不起”“要不起”“打不起”“吃不起”“吹不起”“撑不起”“干不起”“承受不起”“错不起”“失败不起”“拉不起”“推不起”“瞧不起”“输不起”がそれである。

以上、一部の例のみを取り挙げただけだが、この分類に属している“X不起”の数が最も多いと言っても過言ではない。

この分類に属しているものに関して下記の“吹不起”の例文を考える。

○电费涨了，空调都吹不起。／電気料金が値上げして、エアコンもつけられない。
○这是一沟绝望的死水，清风吹不起半点漪沦。／これは一筋の溝の絶望的な澱みであり，清らかな風は、僅かのさざ波も吹き起こせない。

例①ではエアコンが使えない原因は「電気料金の値上げ」であり、つまりこの例文の核心的な意味は「電気料金を支払えない」ということである。しかしながら例②は「風」が「波を吹き起こせない」ということであるため、経済的能力とは関連しないものである。上記の例文のようにこの場合の“X不起”は、異なる場面では、異なっている意味を表している。

次の“爱不起”の例も同様で、「経済的能力あり」と「経済的能力と関連性がない」の両方を表すことができる。

○现在过生日过节日都得送礼物，便宜的还不行，这个时代是一个爱不起的时代。/ 今相手の誕生日でも年中行事でも相手にプレゼントをあげないといけない。更に安いものが駄目って、この時代は本当に愛せない時代だ。①
○不是不爱了，只是爱不起了！/ 愛さないということではなく、愛せないの。②

上記の例文のように、例文①の「愛せない」の原因が「プレゼントを買えない」ということであるので、つまり経済的能力と関連しており、“X不起”構文の核心的な意味「支払えない」、或いは「金銭的不足」の意味を表している。例文②の“爱不起”は発話者自身の境遇により、他人を愛せないという意味を表している。このような二つの場面で用いられるため、この例文を、両方の意味を持つものに分類することとする。

またこの類では直接、金銭関連とは言えないが、文脈により、金銭的な原因で「不可能」を表す場合では動詞だけではなく、センテンス全体がこのような意味を表す原因を表す場合もある。このような用例はほかにもある。下記の“承受不起”の例文を考える。

○对伊拉克的任何军事打击都将对整个地区的人类，政治和经济产生负面影响，这一地区再也承受不起更多的冲突和灾难。／イラクへのどんな軍事行動でもこの地域の人、政治と経済へ悪影響を与える、この地域は更なる衝突や災難に耐えられない。
○农民人均纯收入仅二，三百元的，一年10来元的负担也承受不起。/ 農民の１人当たりの平均手取り金はわずかの二、三百元、一年十数元の費用も負担できない。

上記の例文の“承受不起”自体は“买不起”などの金銭と関連している動詞とは異なり、経済的能力の有無を表せない。このため“承受不起”の意味は前後の文により異なってくる。“承受不起更多的冲突和灾难”「更なる衝突や災難に耐えられない」の用例では「耐えられない」ものは「衝突と災難」であるので、経済的能力と関連性がないと判断できる。その反面、“一年10来元的负担也承受不起”（年に十数元の費用も負担できない）の用例では「負担できない」ものは「十数元の費用」である。金銭と関連しているため、この場合は経済的能力と関係すると判断できる。つまり、この分類に属す“X不起”構文は上記の例文のように、“X不起”構文自体が経済的能力の有無を表せないが、前後の説明や原因などの文により、そのような意味を表すことができる。

「経済的能力あり」と「経済的能力と関連性がない」の両方を表すことができる意味をもつ③類に属している“X不起”構文の用例が多い。第４節で詳しく説明することとする。

④特殊な“X不起”構文

上記の①類、②類の表現はいずれも何かができないことを表す表現である。だが、④類は何かができないことを表す表現ではない。筆者は「特殊な“X不起”」類と呼ぶ。“对不起”“了不起”がそれである。

“对不起”は「動詞＋補語」の形で可能補語としても用いられているが、現代中国語では動詞としての用い方以外、申し訳ない気持ちを表し、挨拶言葉として使われている場合が多い。

本研究は動詞の補語文として“X不起”構文を中心に研究するが、前述のとおり一部の形容詞は研究範囲に含まない。“了不起”は“X不起”構文の形でありながら形容詞として用いられている。可能の意味を表しているものではないが、“X＋不起”の形として存在しているので、この類別に分類することにする。

つまりこの類別に属するものは「立派」「すごい」の意味を表し、形容詞として使われている“了不起”と挨拶言葉になっている“对不起”の二つである。“了不起”と“对不起”は上記の図表１の分類に当てはまらないため、「特殊な“X不起”構文」とする。詳しくは第５節で説明することとする。

第２節　経済的能力と関係する場合

本節では①類の経済的能力と関係する例を中心に説明することとする。
下記の例を考える。

①中国語の“买不起”と日本語の「買えない」

“买不起”の“买”は「買う」と同じく代金を払って自分のものとすることを表している。購入することを表す動詞である。“买不起”は通常、金銭的に余裕がなく、「買う」という行動ができないことを表す。日本語なら「買うことができない」「買えない」という可能形の構文で表す。

“买不起”は「買えない」と訳すことができるが、「買えない」は“买不起”だけの意味を持っているとは言い切れない。

図表〈2〉「買えない」の二つの意味

買えない(1)	買えない(2)
客観的原因	金が不足
买不了／买不到	买不起

下記の例を考える。

○どの店でも在庫切れだから買えない。／不论哪个店都卖完了，所以买不到。

この例は上記の図表〈2〉の(1)の例に属する。

○もう閉店したから、今日は買えない。／已经关门了，今天是买不了了。

この例も上記の図表〈2〉の(1)の例に属する。

○三万円か、買えないな。／三万日元吗，买不起啊。

この例は上記の図表〈2〉の(2)の例に属する。

上記の例文のように、「買えない」は中国語で三つの表現と対応する。日本語では原因を表していないが、中国語で“了”及び“起”の接続により、直接に原因を表すことができると考えられる。

②中国語の“住不起”と日本語の「Xができない」

○尤其那一带的房子，有钱人不愿意住，没有钱的人住不起。／特にその辺の家には、金持ちなら住みたがらないが、その一方でお金のない人は住めない。

○在海口，你可能买得起房，却住不起房。／海口では、家は買えるが、住めないかもしれない。

“住不起”の“住”の日本語の訳文は必ずしも「住む」という動詞を用いるとは限らない。下記の例を考える。

○有不少人因生病住不起院，只能在家等待死亡。／多くの人は病気にかかっても入院できず、家で死を待つしかない。

中国語の“住院”は「入院する」と訳す。“住不起医院”は入院できないことを表し、原因は空きベッドがないよりも「金がないから入院できない」ということを表す。

“住不起”は家が「買えない」という意味を表しているが、単なる「住めない」という意味を表すこともある。しかしながらこの場合「住めない」も「買えない」も「料金が支払えない」という意味を表している。

③中国語の“飞不起”と日本語の「飛べない」

“飞不起”の“飞”は「飛ぶ」という意味を表しているが、“飞不起”を用いる際には、「飛ぶ」という本来の意味との関連性は比較的低い。“飞不起”の“飞”は日本語では「飛ぶ」と訳している。そして“X不起”構文は動詞の場合では主に可能形と対応しているが、「飛ぶ」の可能形否定文の「飛べない」はすべて中国語の“飞不起”で対応するとは限らない。

○天気が悪いので飛行機は飛べない。／因为天气原因飞机没法飞。
○ペンギンは飛べないのだ。／企鹅是不会飞的。

上記の例文のように「飛べない」は中国語の“飞不起”で対応できない場合もある。日本語の「飛ぶ」は飛翔するという意味を表している。しかしながら、中国語の“飞”は飛行機に「乗る」ことをも表す。

○机票太贵了飞不起／航空券が高すぎるから乗れない。

“飞”は「飛ぶ」と訳しているが、交通手段に使われる際には、「乗る」という意味を表していると考えられている。それ以外、経済能力がないことを表す「買えない」に対応する場合もある。

乗り物と関係する表現にもう一つ“坐不起”がある。

○新干线太贵了坐不起。／新幹線のチケットが高すぎるから乗れない。

チケットが高すぎて買えない、飛行機に乗れないことを中国語で“坐不起”と言うこと

もある。“飞不起”は飛行機に限定されていることに対して“坐不起”は全ての交通手段に使える。

第３節　経済的能力と関連性がない場合

本節では②類の経済的能力と関連性がない例を中心に説明することとする。

①中国語の“提不起”と日本語の「持ち上げられない」

中国語の“提不起”は具象的な対象語にも抽象的な対象語にも用いられる。それぞれの場合では、日本語の訳文が異なる。下記の例文を考える。

○我有段时间对什么都提不起干劲儿。／しばらくの間は何もやる気が出なかった。

上記の例文のように、この場合の“提不起”の対象語は“干劲儿”（やる気）であるため、抽象的なものとされる。このような用法の例文はほかにもある。

○提不起兴趣写邮件。／メールをする気になれない。
○我提不起做任何事的干劲。／何もする気が起こらなかった。

上記の例文のように、この場合の“提不起”の対象語は主に「やる気」「する気」などであり、発話者、或いは主語の「やりたくない」という心情を表す。このような表現を可能表現として考えれば、ここで用いられる“提不起”は発話者／主語の「体」、或いは「内心」から、何らかの「感情」を出せないということである。

これ以外、対象語は具象的なものの例文もある。

○小孩子提不起那么重的东西。／子供はそんなに重いものを持ち上げられないよ。

上記の例文のように、“提不起”の対象語は具象的なものの場合、日本語の「持ち上げる」と対応している。

②中国語の“受不起”と日本語の「受けられない」「恐れ入る」

“受不起”はプラスとマイナスの意味を両方持っている。話の主体が能力や功労などで受け入れない苦労や褒賞を受けた場合に用いられている。しかも苦労や褒賞が予想を上回った場合に用いられることが多い。

○你可受不起那份儿苦。／君にはとてもあの苦しみには耐えられない。
○今天承您特意赏光，实在受不起。／本日はわざわざおいでくださいまして、まことに恐れいります。

「恐れ入る」と訳す場合は話し手の「謙虚」を表し、プラス評価の意味を持っている。それに対して、「耐えられない」の対象は、「苦労」や「痛み」などマイナス評価のものが多い。「根性がない」「能力が足りない」という深層的な意味も含まれているのでマイナス評価の意味を持つ言葉に分類したほうがふさわしいと考えられる。

“受不起”の一部の用例では「謙虚」を表しているものの、この場合“受不起”は発話者自身の「能力」に関する「判断」であるため、可能表現に属している。

第４節　両方の意味を持つ“Ｘ不起”構文

本節では経済的能力と関係する場合と経済的能力と関連性がない場合の両方をもつ“Ｘ不起”構文の表現の特徴について考察する。下記の例で考える。

①中国語の“开不起”と日本語の「運転できない」「冗談が通じない」

○油价涨了，开不起车了／ガソリンの値上がりで車は運転できなくなる。

この場合、運転できないのはガソリンが買えないという外的要因による。運転の可能形「運転できる／運転できない」は「客観的に運転不能」ということを表し、いわゆるガソリンの有無という原因と無関係で運転することができないことを表す。しかしながら、この場合の“开不起”は運転できるが運転したくないという主観的なもの、或いは経済的な原因で運転したくないという意味を表している。そのため客観性を持つ可能形より主観性を持つ言葉に訳すほうがよりふさわしい。

○这车这么贵，不是租的我根本开不起。／この車は値段が高すぎる。レンタルでなければ私には運転できない。

上記の“开不起”は変化の意味を持たず、「買えない」という意味を説明するだけの文である。この場合の“开不起”は客観的に事実を述べる文なので可能形と対応すると考えられる。

経済能力と関係するものは通常、客観性が強く、日本語では動詞の可能形と対応できるが、“开不起”は金銭的な原因で「運転できない」意味しか表せない。金銭的以外の原因で

「車を運転できない」の場合用いられる中国語の可能表現がまた異なる。下記の例を考える。

○我没有驾照开不了车。/ 私は運転免許がないから、車を運転できない（運転することができない）。

上記の例文のように、経済的能力と関係する“开不起”と同様、客観的な原因で「できない」を表しているが、経済的能力と関連性がない原因の場合、“开不起”ではなく“开不了”が用いられる。これに関して第３節で詳しく説明することとする。

経済状況と関係する以外、“开不起”はもう一つ、範囲を超える意味としても使われている。

○他这个人开不起玩笑。／彼という人は冗談が通じないのだ。

この用い方は“开玩笑”（冗談を言う）からきた表現である。主に人の性格を表す場合に使われている。主観性が強い文であるため、可能形と対応しない表現と考えられる。

上記の例から、“Ｘ不起”構文の「両方の意味を持つ」分類で日本語における動詞可能形と対応させられるか否かは、言葉の主観性と客観性により決められている。その関係性は以下の図のように成り立っている。そして経済と関係する「金が不足」という意味を表しているものは客観的な事実を述べる文であるため、日本語における動詞可能形と対応する。

図表〈3〉　主観性の強弱

②中国語の“看不起”／“瞧不起”と日本語の「見れない」「見下す」「軽蔑する」

“Ｘ不起”構文に用いられている動詞を日本語に訳す際には、単なる可能形と普通形の変化になるとは限らない。次に“看不起”と“瞧不起”（“看不起”と“瞧不起”の意味が一部の場面では一致しているので、併せて説明することとする）の例を用いて説明する。

○为什么一些居民看不起／瞧不起病住不起院？／一部の住民はなぜ病院でお医者さんの診査を受けられない、入院できないのか。

○他想头一回到大城市，不要给人家笑话自己是土包子，叫人看不起／瞧不起。／彼は初めて大都会に来たので、他人に泥臭いやつと笑われないように、見下げられないよ

うにすると心に思う。

上記の二つの例文の場合、“看不起”と“瞧不起”、両方とも用いられる。
下記の例を考える。

○是农民看不起电影吗？是电影不适合农村人的口味，还是因为其他原因？／農家の人は映画を見るお金がなく、映画が見られないのか、それとも農家の人は映画に興味がないのか、或いは他の原因があるのか。

上記の“看不起病”“瞧不起病”（医者に診てもらえない）と“看不起电影”（映画が見られない）はいずれも経済的能力と関連し、日本語における動詞可能形と対応している。しかしながら“看不起人”“瞧不起人”は日本語で「人を軽蔑する」「見下す」の表現に対応している。この場合“看不起”“瞧不起”は動詞“看”（見る）を中心とする意味を表しているとは限らない。“看不起”と“瞧不起”の“看”“瞧”を「見る」の意味で用いる場合、“看不起”と“瞧不起”の意味は「見ることができない」であり、つまり結果的には「見ない」ということである。しかしながら、「人を軽蔑する」「見下す」という意味で用いる場合、実際には「見る」わけではなく、他人に対して評価することを表している。

③中国語の“扶不起”と日本語の「助けられない」

“扶不起的阿斗”（助けようのない阿斗）という表現があり、その“扶不起”は本来、「助けようとしても助けられない」という意味を表し、経済的能力と関連性がない。しかし“扶不起”は近年、意味的変化があり、経済的に関連している用法も生まれ、この類に属するようになった。下記の二例がそれである。

○名牌的大敌有两个：一个是别人假冒，一个是自己到自己的牌子。假冒，尚可以治理，自己倒了牌子，谁也扶不起。／ブランド品の敵は二つあり、一つは他社パクリで偽物を作ったこと、もう一つは自分で自分のブランドを潰すこと。偽物はまだ対処できるが、自分で自分のブランドを潰す行為は、誰にも助けられない。

上記の「助けられない」は助ける方法がないという意味を表す。しかしながら近年、「助けたくない」という意味にも使われるようになった。

○不是我扶不起，而是我实在是没有10万块。／彼を助けたくないということではなく、本当に十万元を持っていないからだよ。

中国語では、転んだ人を起こすことを“扶”と言う。近年来、転んだ人を助け起こした人が逆に転んだ人に賠償を請求される事件があり、社会問題となっている。従って“扶不起”は金が払えない意味を持つようになった。

第５節　特殊な“X不起”構文

第１節～第４節では、中国語の“X不起”構文の用い方について、経済的な能力の有無の視点から考察してきたが、本節では経済的な能力の有無とは無関係の“对不起”と“了不起”という特殊な“X不起”構文の用法について考える。

①挨拶言葉の“对不起”と可能補語の“对不起”

“对不起”は主に挨拶言葉として謝罪の場合に使われている。よく日本語の「すみません」「申し訳ない」などと対応しており、後悔や義理立てなど、できないという意味をも表している。意味的には同じであっても、構造や用い方を基準として挨拶表現と動詞補語文に分かれる。“对不起”は挨拶表現なのか、それとも“X不起”構文の動詞補語文なのか、“对”の意味で決まると考えられる。下記の例文を考える

○做了对不起他的事。／彼に顔向けできないことをした。①
○对不起，我做错了。／すみません、間違いました。②

上記の二つの例文はどれでも「申し訳ない」という謝罪の場面で使われるが、例文①では目的語“他”があるので“对”が述語として用いられている。これは明らかに「動詞 V+不起」の動詞補語文（補語の可能式）である。これに対して、例文②では目的語がないため、“对”が述語として存在している根拠がなくなり、動詞補語文ではなく独立している挨拶の表現と考えたほうが妥当である。

“对不起”の日本語の訳文は、構成的視点から下記のように二つに分ける。

図表〈4〉“对不起”の二つの意味

对不起(1)	对不起(2)
謝罪	後悔や義理が立たない
挨拶として単独使用可	単独使用不可　対象語が必須
すみません、申し訳ない、恐縮する	申し訳ない、裏切る…

○这么简单的问题都发现不了，不起诉你太对不起社会了。／こんな簡単な問題も発見できず、あなたを不起訴すれば社会に申し訳ないのだ。(2)
○我向他们说了声对不起。／彼らに「すみません」と言った。(1)

〇我永远不能做对不起朋友的事。／私はいつまでも友たちを裏切ることはしない。(2)
〇他也许觉得很对不起我吧。／たぶん彼は私に申し訳ないと思ったのだろう。(2)

以上のように「謝罪」の意味として使われている場合、「すみません、申し訳ない、恐縮する」という一つの言葉だけでも使うことができる。しかしながら「文句や後悔」の意味として使われる場合、【「何か」(対象語) + に + 動詞】構文で表現する。

〇我　对不起　他 (対象語)。／彼 (対象語)　に　申し訳ない。

この場合には対象語を省略することができないのが必須条件となっている。この用法は一般的に「後悔や義理が立たない」という意味を表している。それ以外“对不起”構文は下記の例文のように相手を脅すという意味で用いられる特殊な用法もある。

〇你若再无礼，我手中有棍子，我可就对不起你了。／これ以上失礼なことをしたら、おれは棒を持っているから、あなたをぶん殴るぞ。

このような用法では「相手を殴ってしまうかもしれない」という意味を表す機能、すなわち脅す意味を表す機能がある。これは古文の用法の名残(なごり)と見られる。構文の特徴から分類すれば“对不起”のこの用法も動詞補語文に属していると考えられる。
“对不起”が動詞補語文として用いられる場合、或いは挨拶として用いられる場合、対応する日本語の表現も異なってくる。しかしながら通常、「謝罪」と「義理が立たない」の意味で使われるが、もう一つ特殊な場面に使う場合もある。

〇古诗都是对句，你用风对我这地，怕是对不起吧。／漢詩は全部対句であり、風という字を地に対応するなんて、できないでしょう。(中国の一部の詩では、文字もペアで使わなければならない。「天」と「地」、「雨」と「風」など)

この場合では対不起の“对”は対句の中の動詞であり、構造からみれば上記の動詞補語文であるが、このように謝罪の意味を持たない“对不起”の用法はこの例しかない。

②“X不起”構文に属している“了不起”

“了不起”は品詞性からみれば最も特徴的な用法である。同じ特殊な用法とされる“对不起”と同じように特殊な性質を持っている。“了不起”は動詞の属性をまったく持っていない点に注目すべきである。

○他是个了不起的人。／彼はすごい人だ / たいしたものだ。

上記の例文のように“了不起”は動詞ではなく形容詞である。そして日本語の中では一般的に形容詞と対応しているが、『中日辞典』では「すばらしい」「すごい」「立派だ」「大変だ」「重大である」という解釈で説明している。

○没有什么了不起的困难。(深刻な問題は何もない／これといったたいした問題ではない)①
○没什么了不起的。(大した問題ではない。)②

例②のように“了不起”は動詞の連体形に対応し、形容詞の役割を担っているということである。

まとめ

本論文は、中国語の“吃不起”“买不起”のような“X不起”の用い方の特徴について、また日本語にどのように訳すかを中心に論じたものである。“X不起”構文を経済的能力の有無を基準として、「経済的能力と関係するもの」「経済的能力と関連性がないもの」「両方の意味を持つもの」と「特殊な“X不起”構文」の四つに分けた。「経済的能力と関係するもの」は主に「金が足りないことからできない」と関連している表現である。「経済的能力と関連性がないもの」に属す“X不起”構文は話し手或いは主語の能力や感情により「できない」という意味を表す。「両方の意味を持つもの」は文脈により、「経済的能力と関係する」「経済的能力と関連性がない」の両方の意味を表せる意味を持つ“X不起”構文である。そして「特殊な“X不起”構文」は上記の三つの分類に属していない“对不起”と“了不起”である。

参考文献

(1)『实用现代汉语语法』（刘月华等　1983　外语教学与研究出版社）
(2)『现代汉语语法讲话』（丁树生等　1961　商务印书馆）
(3)「可能补语应发的研究」『现代汉语补语研究资料』(刘月华　1980　北京语言学院出版社)
(4)『中国語虎の巻 : 実力アップ 15の秘伝』（彭飛　東方書店　2017）
(5)『現代中国語における可能表現の意味分析 : 可能補語を中心に』（安本真弓　2009　白帝社）

「恵まれる」構文の特異性

馮　一峰

要　旨

本研究主要就中国人日语学习者不能够熟练使用的日语中的「恵まれる」句式结构的特殊性进行了分析。在考察「恵まれる」句式之前，首先对日语的直接被动句的结构进行了分析。其次，通过与直接被动句的结构进行比较了解到「恵まれる」句式可以分为两种。一种是使用频率较低的与直接被动句具有相同结构的「恵まれる」句式，另一种是使用频率高与直接被动句具有不同结构的「恵まれる」句式。针对与直接被动句具有不同结构的「恵まれる」句式能够成立的原因，本研究认为与直接被动句具有相同结构的「恵まれる」句式中发生了 Applicative 操作，也就是项的替换操作，由于这种操作使得日语被动态的「恵まれる」被自动词化，最终产生了现在使用频率高与直接被动句具有不同结构的「恵まれる」句式。这是「恵まれる」句式所具有的特殊性，也正是由于这种特殊性导致中国人日语学习者不能够熟练使用该句式。

1．はじめに

日本語の動詞「恵む」は、よく「いい天気に恵まれた」、「経済的に恵まれていない」のように受動形の「恵まれる」という形式で用いられる。しかし、このような表現は、中国人日本語学習者にとって案外難しい。

中国人日本語学習者における「恵まれる」構文[1)]の使用状況を明らかにするために、30人[2)]を対象とする翻訳調査を行った。調査結果は下記の表１のようにまとめられる。

表１　中国人日本語学習者における「恵まれる」構文の使用状況

中国語の原文	コーパスの訳文	被験者が用いた表現と人数			
我在中国的那段时间里，有幸尝到了许多稀奇古怪的美味。	おかげで、中国に滞在していた折、奇妙なものまで口に入れる幸運に恵まれた。	奇妙なものまで食べられた／食べることができた（16人）	奇妙なものまで食べる機会／チャンスがあった（14人）		恵まれる構文（0人）
自由是人民争来的，不是什么人恩赐的。	自由はだれかから恵まれるものではなく、人民がたたかいとるものである。	自由はだれかからもらった／いただいたものではない（9人）	自由はだれかに与えられた／授けられたものではない（21人）		恵まれる構文（0人）
不发达地区又大都是拥有丰富资源的地区，发展潜力是很大的。	未発達地区はたいてい資源に恵まれており、発展の潜在力は極めて大きい。	未発達地区は資源が豊かである（15人）	未発達地区は豊な資源を持っている（6人）	未発達地区には資源がたくさんある（9人）	恵まれる構文（0人）

1）本研究では、動詞「恵む」の受動形の「恵まれる」が用いられた文を「恵まれる」構文と呼ぶ。
2）被験者は日本語学習歴３年～６年の中国人日本語学習者である。

表１で取り上げられた三つの中国語の文は、BJSTC日中対訳コーパスにおいて、いずれも日本語の「恵まれる」構文で翻訳されている。調査の結果では、中国人日本語学習者30人の被験者のうち、「恵まれる」構文を用いて翻訳した被験者は一人もいなかった。このため、「恵まれる」構文は中国人日本語学習者にとって使いこなせない表現である可能性が高いと言うことができると考えられる。

翻訳調査を行った後、フォローアップインタビューも行い、「恵まれる」構文を用いなかった理由について聞いてみた。被験者30人のうち、12人は「恵まれる」構文を知らなかったと答え、残りの18人は「恵まれる」構文を知っているが、用い方を知らないため、用いなかったと答えた。「恵まれる」構文の用い方を知らないという原因で「恵まれる」構文を用いなかった被験者数は半分以上を超えている。

翻訳調査とフォローアップインタビューの結果から、「恵まれる」構文は中国人日本語学習者にとって難しく、使いこなせない表現であると言うことができると考えられる。また、翻訳調査とフォローアップインタビューの結果を通して、「恵まれる」構文の特徴及び用い方についての日本語教育は十分に行われていないことが分かった。

したがって、本研究は「恵まれる」構文の特徴及び用い方について考察し、中国語と対照しながら、日本語の受動構文の特異性を明らかにする。

2.「恵まれる」構文

2.1「恵まれる」構文の構造

「恵まれる」構文の構造が直接受動文の構造と一致すれば、中国人日本語学習者はうまく「恵まれる」構文を使えるはずである。しかし事実はそうではない。したがって、「恵まれる」構文の構造は通常の直接受動文とは異なる可能性があると考えられる。「恵まれる」構文の構造を考察する前に、日本語の直接受動文の構造と生成過程を明確に記述しておく必要がある。

2.1.1 直接受動文の構造と生成過程

直接受動文と呼ばれる受動構文は次のようなものである。

（1）花子が太郎に殺された。

（2）は直接受動文の「花子が太郎に殺された」が能動文の「太郎が花子を殺した」から派生する過程を表している。

（2）能動文：太郎が　花子を　殺した。

受動文：花子が　太郎に　殺された。

能動文の「太郎が花子を殺した」から直接受動文の「花子が太郎に殺された」に変形される時、能動文の主語「太郎が」は付加語として「太郎に」に変わり、目的語の「花子を」は受動文の主語「花子が」に変化している。そして、動作主の「太郎」と被動作主の「花子」の語順は変更され、動詞の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が付加される。動作主、被動作主と述語動詞をそれぞれX、YとVで表記すると、能動文から直接受動文を派生する過程は以下のようにまとめられる。

（3）能動文：Xが　Yを　V

受動文：Yが　Xに　V-「ラレ」

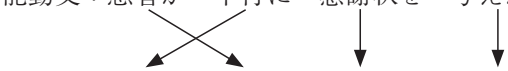
能動文から直接受動文に変形される時、能動文の「ガ格」が「ニ格」に変わり、「ヲ格」が「ガ格」に変わるのは一般的である。そして、動作主と被動作主の語順は変更され、動詞の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が付加される。このような過程を経て、直接受動文の「YがXにV-「ラレ」」という構造が得られる。

寺村（1982）は直接受動文の動詞に授受動詞が来る場合、構造が違ってくると指摘している。

（4）中村が患者に感謝状を与えられた。

（5）は受動文の「中村が患者に感謝状を与えられた」が能動文の「患者が中村に感謝状を与えた」から派生する過程を表している。

（5）能動文：患者が　中村に　感謝状を　与えた。



受動文：中村が　患者に　感謝状を　与えられた。

能動文の「患者が中村に感謝状を与えた」から受動文の「中村が患者に感謝状を与えられた」に変形される時、能動文の主語「患者が」は付加語として「患者に」に変わり、能動文の間接目的語「中村に」は受動文の主語「中村が」に変化している。そして、動作主の「患者」と受益者の「中村」の語順は変更され、対象と動詞の位置はそのまま変わらず、受動

態を表す受動形態素「ラレ」が動詞に付加される。動作主、受益者、対象と述語動詞をそれぞれX、Y、ZとVで表記すると、授受動詞が用いられた直接受動文の派生過程は以下のようにまとめられる。

（6）能動文：Xが　Yに　Zを　授受動詞V

受動文：Yが　Xに　Zを　授受動詞V-「ラレ」

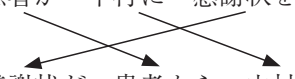
授受動詞が用いられた能動文から受動文に変形される場合、能動文の「ガ格」が「ニ格」に変わり、「二格」が「ガ格」に変わるのは一般的である。そして、動作主と受益者の語順は変更され、対象と動詞の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が動詞に付加される。このような過程を経て、授受動詞が用いられた直接受動文の「YがXにZを授受動詞V-「ラレ」」という構造が得られる。

しかし、動詞に授受動詞が来る場合、（7）に見られるように、Zを主格に立てる場合が可能である。

（7）感謝状が患者から中村に与えられた。

（8）は受動文の「感謝状が患者から中村に与えられた」が能動文の「患者が中村に感謝状を与えた」から派生する過程を表している。

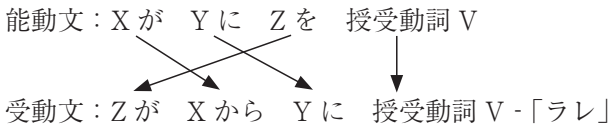
（8）能動文：患者が　中村に　感謝状を　与えた。



受動文：感謝状が　患者から　中村に　与えられた。

能動文の「患者が中村に感謝状を与えた」から受動文の「感謝状が患者から中村に与えられた」に変形される時、能動文の主語「患者が」は付加語として「患者から」に変わり[3)]、能動文の直接目的語「感謝状を」は受動文の主語「感謝状が」に変化している。動詞の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が付加される。動作主、受益者、対象と述語動詞をそれぞれX、Y、ZとVで表記すると、（8）の直接受動文の派生過程は以下のようにまとめられる。

3）（5）に見るように、能動文の主語が受動文で「ニ格」になってもよいが、（8）では、間接目的語の「中村に」があるため、「ニ格」が継続することになる。一般に同一格要素の隣接は避けられる斜向にあるため、ここでは「から」を用いている。



授受動詞が用いられた能動文から受動文に変形される場合、能動文の「ガ格」が「カラ格」に変わり、「ヲ格」が「ガ格」に変わるのも可能である。そして、動詞の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が付加される。このような過程を経て、授受動詞が用いられた受動文の「Z が X から Y に授受動詞 V -「ラレ」」という構造が得られる。

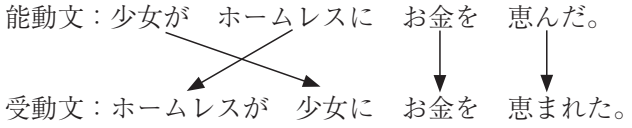
(4) のように Y を主格に立てる場合と違うところは、Z を主格に立てる場合、X は「から」しかとれない。それに対し、Y を主格に立てる場合、X は「に」も「から」もとれる。

2.1.2「恵まれる」構文の構造

直接受動文の構造と対照しながら、「恵まれる」構文の構造を考察する。

(10) a. 少女がホームレスにお金を恵んだ。
　　b. 神様があの夫婦に子宝を恵んだ。

「恵む」は「与える」、「授ける」と同じく授受動詞であるため、授受動詞の直接受動文の変形規則に従い、(10a) を受動文にすると、「ホームレスが少女にお金を恵まれた」[4] になる。(11) は受動文の「ホームレスが少女にお金を恵まれた」が能動文の「少女がホームレスにお金を恵んだ」から派生する過程を表している。



能動文の「少女がホームレスにお金を恵んだ」から受動文の「ホームレスが少女にお金を恵まれた」に変形される時、能動文の主語「少女が」は付加語として「少女に」に変わり、能動文の間接目的語「ホームレスに」は受動文の主語「ホームレスが」に変化している。そして、動作主の「少女」と受益者の「ホームレス」の語順は変更され、対象物の「お金」と動詞「恵む」の位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が動詞「恵む」に付加された。(11) から見れば、「恵む」の受動文は「与える」、「授ける」の受動文と同じ構造をとることができる。しかし、「与える」と同じように、直接目的語を主語に立てることはできない。

4) 受動構文として成立するが、NLT コーパスで例文を検索した結果、使用頻度は低い。

(12)?? お金が少女からホームレスに恵まれた。

(12)が成立するかどうかについて、違和感があると日本人の被験者が答えた。そこで、(12)の文の前に二つのクエスチョンマークを付けた。なぜ(11)が成立し、(12)が成立しないのか。それは、(12)の場合、直接目的語の「お金」が主語になり、「恵む」から受けている選択制限を破ったからである。(11)の場合、主語になったのは能動文の間接目的語の「ホームレス」であり、直接目的語の「お金」は相変わらず「恵む」から選択制限を受けている。このため、(11)は問題なく成立する。それに対し、(12)の場合、直接目的語の「お金」が主語になり、「恵む」から受けている選択制限を破ったと考えられているため、違和感のある文になったのである。

(10b)を(10a)と同じように受動文にすると、「あの夫婦が神様により子宝を恵まれた」になる。(13)は受動文の「あの夫婦が神様により子宝を恵まれた」が能動文の「神様があの夫婦に子宝を恵んだ」から派生する過程を表している。

(13) 能動文：神様が　あの夫婦に　子宝を　恵んだ。

受動文：あの夫婦が　神様により　子宝を　恵まれた。

(13)の受動文の「あの夫婦が神様により子宝を恵まれた」は成立するが、日本人母語話者に聞いたところ、この場合、「恵まれる」の代わりに「授けられる」がよく用いられるとのことである。あるいは、(14)のような形式で用いられるという。

(14) あの夫婦は子宝に恵まれた。

(15)は受動文の「あの夫婦は子宝に恵まれた」が能動文の「神様があの夫婦に子宝を恵んだ」から派生する過程を表している。

(15) 能動文：神様が　あの夫婦に　子宝を　恵んだ。

受動文：あの夫婦が　（神様により）　子宝に　恵まれた。

能動文の「神様があの夫婦に子宝を恵んだ」から受動文の「あの夫婦は子宝に恵まれた」に変形される時、能動文の主語「神様が」は付加語として「神様により」に変わり、能動文の間接目的語「あの夫婦に」は受動文の主語「あの夫婦が」に変化している。そして、動作主の「神様」と受益者の「あの夫婦」の順番は変更され、対象物の「子宝」と動詞「恵む」の

位置はそのまま変わらず、受動態を表す受動形態素「ラレ」が動詞「恵む」に付加された。

（14）の特徴的な点は二つある。一つ目は、能動文の主語「神様が」は付加語として「神様により」に変形した後、基本的に文中には現れないということである。二つ目は、直接目的語の格変化である。受動文にすると、直接目的語は「ヲ」格から「二格」に変わっている。

（15）の「恵む」の受動構文は（11）と異なり、特殊な構造を持っている。（15）の「恵む」の受動構文の構造を下記のように表示できる。

（16）Y が Z に恵まれる

NLT コーパスで例文を検索したところ、（16）の構造は（11）の構造より使用頻度が圧倒的に高い。また、（11）は間接目的語が主語になる直接受動文なので、これ以上分析する必要はなく、（16）のような特殊な構造を持っている「恵まれる」構文を研究対象とする。森田（2002）は日本語の受動文の文型の種類を下記の表２のようにまとめた。

表２　日本語の受動文の文型の種類

1. A ガ自動詞	→	(B ハ)A ニ　自動詞ラレル	迷惑
2. A ガ (A ノ)C ヲ他動詞	→	(B ハ)A ニ C ヲ　他動詞ラレル	迷惑
3. A ガ B ニ C ヲ他動詞	→	B ハ A ニ/カラ[5] C ヲ　他動詞ラレル	被役・受益
4. A ガ B ニ自動詞	→	B ハ A ニ/カラ　自動詞ラレル	被害
5. A ガ (B ノ)C ヲ他動詞	→	B ハ A ニ C ヲ　他動詞ラレル	被害
6. A ガ C ヲ他動詞	→	C ハ A ニ　他動詞ラレル	被害
7. A ガ C ヲ B ニ他動詞	→	C ハ A ニ/カラ B ニ 他動詞ラレル	被役・受益
8. (A ガ)C ヲ B ニ他動詞	→	C ガ A カラ/ニヨッテ[6] B ニ他動詞ラレル	被役・受益
9. (A ガ)C ヲ他動詞	→	C ガ　他動詞ラレル	様態
10. A ガ C ヲ他動詞テイル	→	C ハ A ニ　他動詞ラレテイル	様態
11. (A ガ) 他動詞テイル	→	A ガ　他動詞ラレテイル	様態（普遍、婉曲）

森田は日本語の受動文の文型を 11種類にまとめ、一般的な日本語の受動文の文型はすべてその 11種類に含まれると指摘している。しかし、「恵まれる」構文はこの 11種類の中に含まれていない。

能動文の「恵む」構文の構造は「A ガ B ニ C ヲ恵む」である。構造的には文型３と同じである。しかし、「恵まれる」構文の構造は「B ハ A ニ/カラ C ヲ他動詞ラレル」という構造ではなく、「B ハ（A ニヨッテ）C ニ恵まれる」という構造である。また、「恵む」という動詞は「A ガ C ヲ B ニ恵む」という構造でも文が作れる。この場合の能動文の構造は文型７と文型８と同じである。しかし、文型７と文型８の能動文に対応する受動文はそれぞれ「C ハ A ニ/カラ B ニ 他動詞ラレル」と「C ガ A カラ/ニヨッテ B ニ他動詞ラレル」という構造を持って

5）森田が用いた表記法で、「ニ」か「カラ」のいずれも可能であることを表している。
6）「カラ」か「ニヨッテ」のいずれもとれることを表している。

いる。文型７と文型８の受動文においては、両方とも「ヲ格」が「ガ格」になっている。「恵まれる」構文の生成過程においては、「ヲ格」が「ガ格」になることができず、「ニ格」になることが中心であるため、文型７と文型８と異なることは明らかである。

したがって、「恵まれる」構文の構造はこの11種類の受動文の文型の中に含まれていないと言える。本研究は「恵まれる」構文の構造を第12種の日本語の受動文の文型として提示したいと考える。

（17）

A ガ B ニ C ヲ恵む	→	B ハ（A ニヨッテ）C に恵まれる

ここまで、日本語の直接受動文の構造と「恵まれる」構文の構造を考察してきた。「恵まれる」構文の構造は直接受動文の構造とは異なることが分かった。これは中国人日本語学習者が「恵まれる」構文を使いこなせない原因であると考えられる。

2. 2「恵まれる」構文が成立する原因

2.1では「恵まれる」構文の構造を直接受動文の構造と対照しながら考察した。「恵まれる」構文の構造は直接受動文の構造と異なり、独特な構造を持っていることがわかった。ここでは、「恵まれる」構文の構造が成立する原因について考察していく。

まず、「恵まれる」構文の構造と授受動詞が用いられる直接受動文の構造との違いを整理する。一つ目は、「恵まれる」構文の主語になるものは能動文の「ニ格」であり、能動文の主語は付加語になり、基本的に文中に現れないということである。二つ目は、「恵む」構文の「ヲ格」が「恵まれる」構文の「ニ格」に変わるという格変化である。

受動態には対応する能動文の動作主を不問に付す機能[7)]があるとされている。能動文の主語は付加語になり、文中に現れないことは日本語、英語と中国語の受動構文において、よく見られる現象である。

(18) a. 太郎が花子を殺した。→ 花子は殺された。
b. Tom killed Mary. → Mary was killed.
c. 张三杀了李四。→ 李四被杀了。

能動文の主語の「太郎」、Tom、“张三”は付加語になり、文中に現れていない。「恵まれる」構文では受動態の動作主を不問に付すという機能により、主語は付加語になったあと、文中に現れなくなると考えられる。また、動作主がわからないときあるいは明示したくない場合に、受動構文が用いられるのもこの機能によるものであると考えられる。

次に、「恵まれる」構文に起きた格変化について考察する。Baker（1988）の指摘によると、

7）蔡全胜（2006）《新日本语概论》黑龙江人民出版社

「恵む」構文から「恵まれる」構文が生成される場合、「子宝を」は基本的にそのまま保持される。しかし、「恵まれる」構文において、「子宝を」が「子宝に」に変わる格変化が起きている。「恵まれる」構文はBakerの指摘に反するものである。なぜ「恵まれる」構文がBakerの指摘に反するのかについて、本稿では「恵まれる」構文は受動態の「恵まれる」が自動詞化し形成されたものであると考える。日本語には次のような例が見られる。

(19) a. 中国は資源に富んでいる。
b. あいつは社会的常識に欠けている。
c. 田舎の若者は文化的な娯楽に飢えている。

(19)では、動詞の「富む」、「欠ける」と「飢える」が用いられている。(19a)は「中国は資源が豊かである」という状態を表している。(19b)は「あいつは社会的常識を持っていない」という状態を表し、(19c)は「田舎の若者は文化的な娯楽を欲しがっている」という状態を表している。構造的には、「XはYにV-ている」という構造を持っている。意味的には、充足あるいは不足な状態を表している。

(20) a. 中国は資源に恵まれている。
b. あの人は才能に恵まれている。

(20)の「恵まれる」構文は構造的には、(19)と同じく「XはYにV-ている」という構造を持っている。また、意味的にも(19)に似ており、充足あるいは不足な状態を表している。(20a)は中国には豊かな資源がある状態を表している。(20b)は「あの人」は才能を持っているという状態を表している。「恵まれる」は「富む」、「欠ける」といった動詞と似たような用い方をされる。このため、「恵まれる」は自動詞化されたと言うことができる。また、「恵まれる」は自動詞化されたため、格変化が起こっており、直接目的語は「ヲ」格から「二格」に変わっていると考えられる。

しかし、なぜ「恵まれる」が自動詞化されたのか。Halpert(2016)が指摘した「適用態」という操作がかかわっていると考えられる。適用態というのは新たな項を与える操作である。

(21) a. 神様がその夫婦に子宝を恵んだ。
b. その夫婦は(神様に)子宝を恵まれた。
c. その夫婦は(* 神様に)子宝に恵まれた。

(21b)は直接受動文の「恵まれる」構文で、(21c)は特別な構造を持っている「恵まれる」

構文である。(21b) では、「子宝を」の意味役割は対象である。(21c) では、

「子宝に」の意味役割は (21b) の「子宝を」の意味役割とは違い、異なる役割を果たしている。したがって、(21c) の「恵まれる」構文は (21b) の直接受動文の「恵まれる」構文の「子宝に」という項が取り除かれ、新たな項「子宝に」を与えられてからできたものであると考えられる。このような項を入れ替える操作は Halpert が指摘した適用態である。適用態という操作が起きたからこそ、「恵まれる」が自動詞化されたと考えられる。

また、「恵まれる」構文は受動態の動作主を不問に付す機能により、能動文の主語は付加語になったあと、文中に現れなくなると説明したが、もう一つの理由が考えられる。(21c) は「子宝に」という項が与えられたので、「神様に」という項とで「ニ格」が続くことになる。一般的に同一格要素の隣接は避けられる斜向にあるため、「神様に」という項が文中に現れないことになったのである。

直接受動文の「恵まれる」構文には適用態という操作が起きており、新たな項を与えられるので、「恵まれる」は自動詞化され、現在よく用いられている特別な構造を持っている「恵まれる」構文になったと考えられる。これは日本語の「恵まれる」構文の特異性であると考えられる。

3. おわりに

本研究は日本語の直接受動文の構造と対照しながら、「恵まれる」構文の統語構造を分析した。分析の結果、「恵まれる」構文の構造は授受動詞が用いられる直接受動文の構造と異なることが分かった。そして、「恵まれる」構文が成立する原因について考察した。直接受動文の「恵まれる」構文には「適用態」という操作が起きており、新たな項を与えられたので、「恵まれる」は自動詞化され、現在よく用いられている特別な構造を持った「恵まれる」構文になったと考えられる。このような特徴は「恵まれる」構文の特異性であると考えられる。また、「恵まれる」構文の構造が一般的な受動文と異なるため、中国人日本語学習者がなかなか「恵まれる」構文を使いこなせないと考えられる。

参考文献

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版 .

森田良行 (2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房 .

蔡全胜 (2006)《新日本语概论》黑龙江人民出版社 .

Baker, M., 1988 *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press.

Halpert, Claire. 2016. *Argument Licensing and Agreement*. Oxford: Oxford University Press.

研究論文

中国語の【V_1＋个＋不／没＋V_2】の用い方の特徴に関する考察

吉野 孝介

要 旨

本文针对汉语学习者使用【V_1+ 个 + 不 / 没 +V_2】时出现的误用，使用语料库中的实际使用语料对汉语【V_1+ 个 + 不 / 没 +V_2】这一结构的语义、语法特征进行了描述及归纳，并着重对 V_1、V_2 的实际使用情况进行了考察。其中 V_1 多为表示状态、动作的动词，V_2 多用“停”“完”等。并采用语料库实际语料调查及语言使用意识调查的方法，对比考察了【V_1+ 个 + 不 +V_2】和【V_1+ 个 + 没 +V_2】、【V+ 个不停】和【不停地 V】的区别。其中【V_1+ 个 + 没 +V_2】结构通常表达说话人的不满，而【V_1 + 个 + 不 + V_2】则没有这种主观感情；与【不停地 V】相比，【V + 个不停】结构能让听话人更有身临其境的感觉。

0．はじめに

中国語の“笑个不住（笑いこける）”“雨下个不停（雨がひっきりなし降る）”のような【V_1+个＋不／没 +V_2】について、辞書や文法の本[1)]では「“个”の機能は補語を導く“得”に近い」のような説明がほとんどだが、日本人の中国語学習者でも次のような誤用[2)]が見られる。

（Ⅰ）とてもショックで、涙が止まりませんでした。

【誤用例①】太受打击了，无法停止掉眼泪。

【誤用例②】受到了很大打击，流泪个不停。

【誤用例①】の“无法停止掉眼泪”と【誤用例②】の“流泪个不停”は、“不停地流眼泪／止不住地流眼泪”“眼泪流个不停”にしなくては不自然である。では、“流泪”を使うのがなぜ不自然なのか、“不停地流眼泪”と“眼泪流个不停”にはいかなる違いがあるのか。辞書と文法の本の説明だけで、【V_1+ 个＋不／没 +V_2】の用い方の特徴を説明しきれないことが

1）『中国語文法用例辞典 ――「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003、呂叔湘編集、牛島徳次翻訳、菱沼透翻訳）、『中日辞典』（1992、北京対外経済貿易大学 、小学館）、『现代汉语词典（第 7 版）』（2016、中国社会科学院語言研究所詞典編集室）、『现代汉语实用标词类词典』（2000、李临定　主编）、『実用現代漢語語法（増訂版）』（2001、劉月華、潘文娯など著）、『漢語量詞大詞典』（2013、劉子平）、『現代中国語辞典』（2001、香坂順一）、『東方中国語辞典』（2004、相原茂、荒川清秀、大川完三郎）などを参照。

2）誤用例は中国語専攻の三年生（日本語母語話者）の作文である。

わかった。

本稿では辞書や文法の本などの作例だけではなく、コーパスなどの実例も考察し、中国語の【V_1+ 个 + 不 / 没 +V_2】の用い方の特徴を明らかにすることをめざす。また実例での使用実態調査、学習者と母語話者の使用意識調査で【V_1+ 个 + 不 +V_2】と【V_1+ 个 + 没 +V_2】、【V+ 个不停】と【不停地 +V】の使い分けも考察していきたいと思う。

1．中国語の【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】の用い方の特徴

本稿では、中国語の【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】については、中国語文法用例辞典――『現代漢語八百詞増訂本』日本語版（2003）、『中日辞典』（1992）、『现代汉语词典（第7版）』（2016）、『现代汉语实用标词类词典』（2000）、『実用現代漢語語法　増訂本』（2001）などを調査した。その結果は次のようにまとめられる。

結果（一）[3]【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】における【不／没 +V_2】は【V_1】の補語、“个”は補語を導くマーカと見られる。この点については、各先行研究はほぼ同様である。ただ、『现代汉语词典（第７版）』（2016）、『漢語量詞大詞典』（2013）は“个”の機能について“使补语略带宾语的性质”（【不 / 没 +V_2】を目的語の働きを持たせる）と述べ、【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】は“得”で導く補語と違うことが分かった。

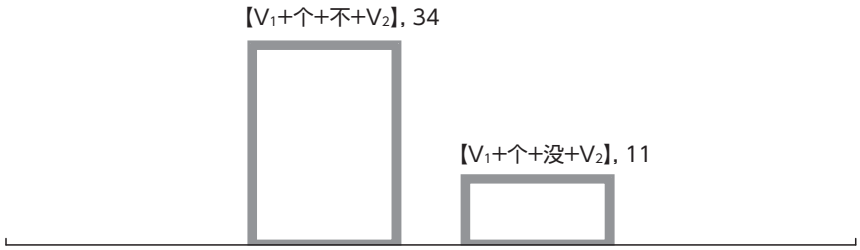
結果（二）[4]【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】における“个”の品詞性については、「量詞」と「助詞」に分かれている。

次に、中国語原文[5]における【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】の実例を考察対象に、その使用実態を調査し、【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】の用い方の特徴を明らかにする。また、【V_1+ 个 + 不／没 +V_2】に対応する日本語も考察する。調査した結果、【V_1+ 个 + 不 +V_2】と【V_1+ 个 + 没 +V_2】の用例数は、下記の通りである。

3）『中国語文法用例辞典――「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）：“个”の機能は補語を導く“得”に近い。（P139）
『中日辞典』（1992）：動詞と補語の間に置く。補語を導く“得”に近い働きをするが、時には“得”と連用することもある。（P495）
『现代汉语实用标词类词典』（2000）：连接动词和补语。这个用法和“得”差不多，有时可以和“得”连用。（P199）
『実用現代漢語語法　増訂本』（2001）：补语为否定形式，通常表示“不停”的意思，其作用是对动作进行描写、说明。（P606-607）
『现代汉语词典（第7版）』（2016）：用于动词和补语的中间，使补语略带宾语的性质（有时跟“得”连用）。（P442）
『漢語量詞大詞典』（2013）：用于动词和补语之间，使补语略带宾语的性质，有时前面需要加“得”连用。（P76）
『現代中国語辞典』（2001）：動詞と補語の間に使い、補語に客語的な働きをもたせるとともに具体化、象形化する。（P400）
『東方中国語辞典』（2004）：動詞と補語の間に用いる。“得”の働きに近い。また“得”と連用することもある。（P441）

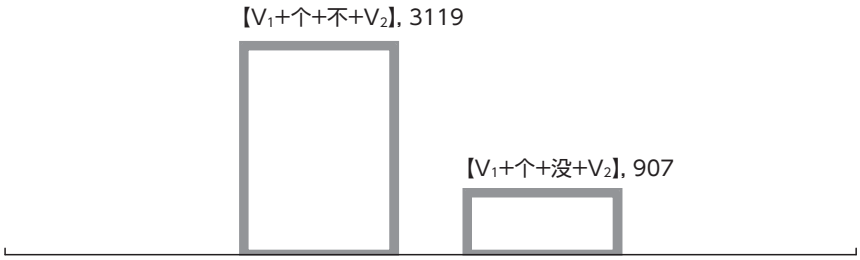
4）『中国語文法用例辞典――「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）、『中日辞典』（1992）、『現代汉语词典（第７版）』（2016）、『実用現代漢語語法　増訂本』（2001）、『漢語量詞大詞典』（2013）、『現代中国語辞典』（2001）、『東方中国語辞典』（2004）は「量詞」、『現代汉语实用标词类词典』（2000）は「助詞」とされている。

5）「中日対訳コーパス」（第一版）



［図表１］

【V_1+个+不/没+V_2】における“不”を使う用例は34例もあり、“没”である用例は11例だけである。【V_1+个+不+V_2】は【V_1+个+没+V_2】の3.09倍となる。では、【V_1+个+不+V_2】は【V_1+个+没+V_2】より多く使用するかを検証するため、「中国語BCCコーパス」[6]を用い、調査した。その用例数は次の通りである。



［図表２］

上記に示したように、【V_1+个+不+V_2】の用例数（3119例）は【V_1+个+没+V_2】（907例）の3.43倍で、【V_1+个+不+V_2】の使用率は【V_1+个+没+V_2】より高いことが裏付けられた。

1.1 【V_1+个+不+V_2】におけるV_1、V_2の使用実態

今回の調査では、【V_1+个+不+V_2】に当たる用例が34例あり、全体の82.2%を占めている。次の例1、例2がそれである。

例１　所有的人都喊起来，笑个不停，仿佛听见了鬼话。（その場にいた人がみな「おお」と声をあげ、たわごとでも聞いたかのように笑い続けた。）

例２　雨下个不停，坐在门槛上，就能洗脚了。（雨は小止みなく降り続いて、戸口の敷居に腰をおろせば、足が洗えるほどになった。）

上記の“笑个不停”“下个不停”はいずれも【V_1+个+不+V_2】に当たる用例であり、V_1の“笑”“下”の状態が持続していることを【不+V_2】の“不停”で表すものである。その日

6）北京語言大学「中国語BCCコーパス」を参照。

本語訳は、それぞれ「笑い続ける」「小止みなく降り続く」となる。調査した結果、“笑”“下”のような「状態の持続」を表す V_1 は“抖”（震える）、“刮”（吹く）、“响”（鳴る、音がする）、“滚”（転がる）、“吵”（言い争う、騒ぐ）、“吹”（吹く）、“玩儿”（遊ぶ）、“哭”（泣く）なども見られる。

また、【V_1+个+不+V_2】に当たる動作 V_1 の繰り返すことを表す例もある。次の例３と例４がそれである。

例３　她这样祝祷着再次把七个“金钱”捧在手里摇个不停，几次想撒手，又几次想再祝祷一番，坚定一下心意，以求更灵更灵的本命卦。（心に祈りながら七つの銅貨を両手に包んで揺すり続けた。幾度も手を離そうとしてはその都度もっとお祈りして、もっと霊験あらたかな卦を出したいと念じたのである。）

例４　想到这里，他的胸口突突地跳个不停。（そう思うとみぞおちのあたりの動悸がとまらなくなった。）

上記の例３の“摇个不停”、例４の“跳个不停”は“摇”“跳”という動作の繰り返すことを表す用例である。その日本語訳は、それぞれ「揺すり続けた」「動悸がとまらなくなった」となる。今回の調査では、動作動詞の“摇”“跳”のような V_1 は“看”（見る）、“问”（聞く）、“写”（書く）、“讲”（話す）、“说”（話す、しゃべる）なども見られる。

では、【V_1+个+不+V_2】における V_1 に用いられる動詞は状態動詞、動作動詞が多いか。それを検証するため、「BCCコーパス」で最も使用回数の多い“停”で検索した結果、次のようにまとめられる（括弧の中の数字は用例数である）。

笑（180）、说（133）、叫（123）、忙（110）、抖（82）、哭（79）、响（72）、跳（60）、下（56）、转（46）、讲（35）、动（27）、咳（24）、流（20）、走（17）、唠叨（16）、骂（15）、跑（14）、吵（12）、喝（12）、摇（12）、哆嗦（11）、喘（10）、看（10）、谈（9）、吃（9）、刮（9）、敲（9）、打（9）、问（9）、晃（8）、吹（8）、唱（8）、喊（8）、闹（7）、颤（7）、闪（7）、吻（6）、抱怨（6）、聊（6）、闻（6）、颤抖（6）、挥（6）、落（6）、抽（5）、咒骂（5）、放（5）、大笑（5）、想（5）、跳（5）、嚷（5）、说笑（5）、做（4）、叫唤（4）、淌（4）、摇晃（4）、滚（4）、照（4）、旋转（3）、变（3）、说（3）、拉（3）、滴（3）、抖动（3）、眨（3）、吐（3）、尖叫（3）、读（3）、挖（3）、嚼（3）、搅（3）、绞（3）、哼哼（3）、扇（3）、烧（2）、开（2）、涨（2）、折腾（2）、回转（2）、哼（2）、嚎（2）、瞧（2）、奏（2）、嗅（2）、敲打（2）、戳（2）、念（2）、踢（2）、跳跃（2）、玩（2）、摆（2）、埋怨（2）、忙乎（2）、飞（2）、嘟哝（2）、忙活（1）、磨（1）、挠（1）、哀叹（1）、拧（1）、扭（1）、呕吐（1）、拍打（1）、拍（1）、盘算（1）、盘问（1）、练（1）、劈（1）、飘（1）、落（1）、狂吠（1）、哭喊（1）、切（1）、亲（1）、求（1）、口吃（1）、绕（1）、揉（1）、傻笑（1）、砍（1）、

叫喊（1）、浇（1）、试（1）、甩（1）、吮（1）、挥舞（1）、晃荡（1）、搜刮（1）、划（1）、吼（1）、跳动（1）、搞（1）、赶（1）、投（1）、发（1）、躲（1）、斗争（1）、掉（1）、祷告（1）、吸（1）、吸溜（1）、捣（1）、荡（1）、弹（1）、挟（1）、写（1）、欣赏（1）、搓（1）、吹嘘（1）、学（1）、瞅（1）、摇撼（1）、抽动（1）、咬（1）、游（1）、眨巴（1）、冲（1）、沾（1）、张罗（1）、吵嚷（1）、找（1）、吵闹（1）、震动（1）、震（1）、挣扎（1）、争斗（1）、争（1）、争论（1）、咒（1）、擦（1）、抓（1）、拽（1）、蹦（1）、追问（1）、奔流（1）、钻（1）、背（1）、侃（1）、摆弄（1）、买（1）、嘟囔（1）、嘀咕（1）

上記に示したように、【V_1+个+不+V_2】におけるV_1に用いられる動詞は状態動詞、動作動詞が多いことが裏付けられた。

次にすべての状態動詞、動作動詞が【V_1+个+不+V_2】におけるV_1に用いられるかを考察していきたい。次の例５を考える。

例５　他东张西望，盯着他们的杂面汤和屋里的陈设只管看个不住。（彼がキョロキョロと部屋の中を見廻し、雑穀の汁ソバや部屋の調度をジロジロ眺める）

例５のように“盯着……看个不住”は自然であるが、“盯个不住／不停”は少し違和感がある。それを検証するため、「BCCコーパス」を検索したところ、“盯个不住／不停”の用例は一例も無かった。“盯”は状態動詞、“看”は動作動詞であるが、なぜ“盯着……看个不住”にしなくては不自然であろか。その理由は、“盯”はすでに「持続」の意味があるため、【V_1+个+不+V_2】におけるV_1には用いられないと考えられる。

冒頭で取り上げた【誤用例②】の“流泪个不停”について、もう一度考えてみよう。日本語原文の「涙を流す／涙が出る」は中国語の“流泪”“流眼泪”“哭”などに対応できる。そのうち、“流”“哭”は状態動詞であり、持続を表すのは“哭个不停”“眼泪流个不停”は自然であるが、“流泪”は上記の“盯”と同様、すでに「持続」の意味があるため、“流泪个不停”とは用いられない。また“流泪”のような離合詞は【V_1+个+不+V_2】のV_1に用いられない[7)]。

今回の対訳データの調査では、【V_1+个+不+V_2】におけるV_1の用例数、及びそれらに対応する日本語訳を［図表３］のようにまとめられる。

7）離合詞は【V_1+个+不+V_2】のV_1に用いるか否かを現代中国語の離合詞（4004語）で検証した。『現代漢語離合詞研究』（2018王俊）のP219「付１現代漢語離合詞　詞表」を参照。

[図表3]

	【V_1+ 个 + 不 +V_2】	日本語訳
1	笑个不停（5例）	笑いが止まらない、笑い続ける［不訳］
2	下个不停（4例）	降りやまぬ、降り続ける
3	忙个不停（4例）	すごく忙しい［意訳］、せっせと動かす、多忙を極める
4	跳个不停（3例）	動悸が止まらない［意訳］［不訳］
5	看个不停 / 不住（2例 /1例）	じろじろ眺める［不訳］
6	抖个不停 / 不住（2例 /1例）	震えが止まらない、震え続ける、ブルブルと震える
7	叫个不停（2例）	一向鳴きやむ気配がない［不訳］
8	摇个不停（1例）	揺すり続ける
9	刮个不停（1例）	吹きやまず
10	响个不停（1例）	［不訳］
11	滚个不停（1例）	［不訳］
12	咳个不停（1例）	なかなか止まらない
13	吵个不停（1例）	［不訳］
14	吹个不停（1例）	吹きやまぬ
15	问个不停（1例）	［不訳］
16	写个不停（1例）	［不訳］
17	玩儿个不停（1例）	［不訳］
18	讲个不停（1例）	［不訳］
19	哭个不住（1例）	泣き止まなかった
20	吐个不休（1例）	吐き続けた
21	说个不住口（1例）	口は止めどが無かった

以上【V_1+ 个 + 不 +V_2】における V_1、V_2 及び【V_1+ 个 + 不 +V_2】の用い方の特徴について考察してきた。その特徴を次のようにまとめられる。

① V_1は“笑”のような状態動詞と“摇”のような動作動詞などの単音節の動詞が多い。前掲したBCCコーパスで検索した結果、V_1は182例あり、そのうち二音節は50例ある。V_1は単音節が多いことが裏付けられた。
② V_1において離合詞を使用することができない。
③ V_2は“停”“住”“休”などのような「止まる、停止する」を表す用例が見られ、そのうち“不停”が最も多い。それを検証するため、「BCCコーパス」で“停”“住”“休”で検索したが、それぞれの用例数は1484例、78例、89例であった。【V_1+ 个 + 不 +V_2】における V_2は“停”が最も多いことが裏付けられた。
④【不 +V_2】で V_1の「状態の持続」「動作の繰り返し」を示し、「止まらない、停止しない」という意味を表す。

1.2 【V_1+个+没+V_2】におけるV_1、V_2の使用実態

今回の調査では、【V_1+个+没+V_2】に当たる用例が11例あり、全体の24.4%を占めている。次の例6、例7がそれである。

例6 天黑，他脑袋一挨上枕头，就开始对着新媳妇叨叨，叨叨个没完。（日が暮れて、頭を枕に載せたとたんに、新妻に向かって切れ目なくしゃべりはじめる。）

例7 他原以为自己是不好说话的。他常常一连几天不说一个字。猛一开口，把自己都吓了一跳。如今这么说个没完，连自己都觉着烦人了。（以前、自分は無口だと彼は思っていた。なん日も一言も口をきかないのが常だったし、とっさに言葉が口をついて出たりすると、自分でもびっくりするほどだった。それが今、こうしてしゃべり続けていると、われながらうんざりした。）

上記の“叨叨个没完”“说个没完”はいずれも【V_1+个+没+V_2】に当たる用例であり、V_1の“叨叨”の状態が持続していることや“说”という動作の繰り返すことを【不+V_2】の“没完”で表すものである。それぞれの日本語訳は「切れ目なくしゃべる」「しゃべり続けている」となる。

調査した結果、“叨叨”のような「状態の持続」を表すV_1は“唠叨”“数落”“催”“嘀咕”“嘟囔”なども見られ、“说”のような「動作の繰り返し」を表すのは“挑”が見られる。また、“叨叨”は話し手の不満を表すものである。“说”はマイナスの意味が特にないが、後文脈の“自己都觉着烦人”で話し手の不満も分かる。

では、【V_1+个+没+V_2】におけるV_1に用いられる動詞は状態動詞、動作動詞が多いか。それを検証するため、「BCCコーパス」で考察した。V_2の“完”で検索した結果、次のようにまとめられる。

说(113)、唠叨(43)、讲(24)、问(20)、哭(19)、笑(16)、谈(14)、聊(12)、闹(12)、吵(10)、叫(8)、想(8)、下(8)、看(8)、喝(7)、打(6)、唱(5)、忙(5)、折腾(4)、瞧(4)、敲(3)、睡(3)、听(3)、开(3)、抱怨(3)、写(3)、流(3)、淌(3)、讨论(2)、唱(2)、读(2)、鼓捣(2)、玩(2)、响(2)、嚎(2)、吹(2)、盘问(2)、念叨(2)、摇(2)、骂(2)、吃(2)、扯(2)、缠(2)、争论(2)、哭闹(2)、走(2)、叨咕(2)、斗(2)、摆弄(2)、纠缠(1)、叫唤(1)、考虑(1)、啃(1)、叫喊(1)、教训(1)、哭诉(1)、练(1)、积(1)、画(1)、胡说(1)、摸(1)、磨蹭(1)、拿(1)、吼(1)、念(1)、哼(1)、盼(1)、评述(1)、气(1)、牵扯(1)、喊叫(1)、喊(1)、亲(1)、嚷(1)、绕(1)、扫(1)、商量(1)、烧(1)、收拾(1)、梳(1)、数落(1)、逛(1)、吮吸(1)、恭维(1)、算(1)、搞(1)、探(1)、改(1)、放(1)、跳(1)、抖(1)、痛哭(1)、投(1)、吐(1)、挖(1)、蹬(1)、喂(1)、得(1)、闲谈(1)、打扰(1)、打量(1)、吹嘘(1)、

欣赏（1）、絮叨（1）、研究（1）、抽泣（1）、怨（1）、赞美（1）、责备（1）、张（1）、震（1）、争（1）、操练（1）、织（1）、重复（1）、咒骂（1）、转（1）、擦（1）、奏（1）、坐（1）、奚落（1）、编排（1）、搬（1）、嘟囔（1）、踱（1）、嘀咕（1）

上記に示したように、【V_1+ 个 + 没 +V_2】における V_1に用いられる動詞は状態動詞、動作動詞が多いことが裏付けられた。

また、今回の対訳データの調査では、【V_1+ 个 + 没 +V_2】における V_1の用例数、及びそれらに対応する日本語訳を［図表４］のようにまとめられる。

［図表４］

	【V_1+ 个 + 没 +V_2】	日本語訳
1	叨叨个没完（2例）	くどくどしゃべっている、切れ目なくしゃべり始める
2	催个没完（2例）	せかし倒し、やたら推測する
3	说个没完（2例）	しゃべり続ける［不訳］
4	唠叨个没完（1例）	［不訳］
5	数落个没完（1例）	いつまでも愚痴っていた
6	叨唠个没完（1例）	くどくど続き
7	嘀咕个没完（1例）	愚痴ばかり
8	嘟囔个没完（1例）	小言が始まる

以上、【V_1+ 个 + 没 +V_2】における V_1、V_2、及び【V_1+ 个 + 没 +V_2】の用い方の特徴について考察してきた。その特徴を次のようにまとめられる。

① V_1は“唠叨”のような状態動詞と“说”のような動作動詞が多い。また V_1は単音節が多いか、二音節が多いかを考察するため、前掲したBCCコーパスで検索もした。V_1は126例もあり、そのうち二音節は45例であった。V_1は単音節が多いという特徴が明らかになった。

② V_2は“完”のような「止まる、停止する」を表す用例が見られる。

③【没 +V_2】で V_1の「状態の持続」「動作の繰り返し」を示し、「止まらない、停止しない」という意味を表す。

④【V_1+ 个 + 没 +V_2】は話し手の文句、不満のニュアンスを表す。

２.【V＋个不停】と【不停地V】

再度、冒頭で取り上げた【誤用例】をもう一度、考えてみよう。日本語の「涙が止まりませんでした」は中国語の“眼泪流个不停”、“不停地流眼泪”で対応できる。補語がない日本

語を母語とする学習者にとって、“眼泪流个不停”のような【V+ 个不停】より、“不停地流眼泪”のような【不停地V】のほうが使いやすい。

2.1【V+ 个不停】と【不停地V】についての使用意識調査

では【V+ 个不停】と【不停地V】について、学習者と母語話者の使用意識には差があるかを下記のように調査した。

【調査例】[8)]

“哎嘿，你带这么多话梅干嘛？”“我爸爸最爱吃话梅，和我。”“说中国话，什么和你？”“我爸爸和我。这你都听不懂呀？”“我以为你爸爸最爱吃话梅和你呢。”＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

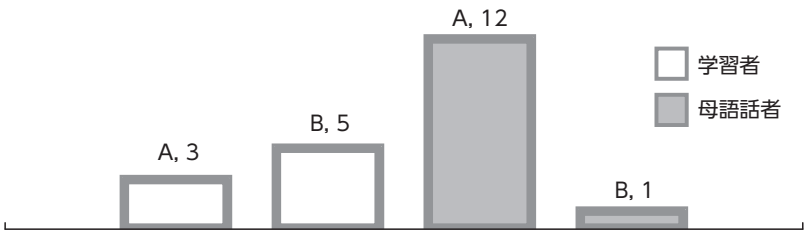
（「なあ、こんなにたくさん話梅を持ってきてどうするんだ」「父さんは話梅を食べるのが好きなの。それに私も」「ちゃんと中国語を話せよ。“それに私も”ってどういうことだ」「父さんと私ってことよ。そんなこともわからないの？」「てっきりきみのお父さんは話梅ときみを食べるのが好きなのかと思った」少女は笑いが止まらなかった。）

下線部の最適訳は→（　）

A 小姑娘笑个不停。

B 小姑娘不停地笑。

調査の結果は次の［図表5］のようにまとめられる。



	A【V+ 个不停】	B【不停地 V】
学習者	3（37.5%）	5
母語話者	12（92.3%）	1

［図表5］

上記に示したように、学習者がAの【V+ 个不停】を選ぶのは8人中3人しかいなかったが、13人の母語話者の内、12人もAを選択した。

8）学習者8人（日本語を母語とする、中国語専攻三年生7人、四年生1人）と中国語母語話者13人（学部生9人、社会人3人。12人全員日本語N1以上、日本滞在歴10年以上。交換留学生1人、日本語N1以上、日本滞在歴1年。）

紙面の調査後、追加にインタビュー調査もした。

［選ぶ理由について］

Ｂを選ぶ学習者の５人は「【V+ 个不停】の使い方にあまり自信がなかったため、Ｂを選んだ。」ということが分かったが、更にＡとＢの違いについて、学習者は全員「別々の文法項目である。それ以外、違いは全く分からない」と回答している。Ａを選ぶ母語話者の12人は「Ｂと比べ、臨場感が感じられるためＡを選んだ」ということが分かったが、Ｂを選ぶ母語話者は「小説の内容と思って、書き手目線にするのはＢのほうが客観的な描写だから」と回答している人も一人いた。

［下線部に“笑个没完”が使えるかどうか、なぜなのか］

学習者は全員「『止まらなかった』を使うので、“笑个没完”のように否定の“没”も使える」と回答したのに対して、母語話者の11人は「“笑个没完”を使うと、その笑い声がうるさく感じるという不満のニュアンスが出てくるから、使えない」と回答した。２人は「今の文脈で判断しにくい。もっと長い文脈があれば、不満のニュアンスがあると判断できれば、“笑个没完”を使える」と回答している。

［ＡとＢはどっちが多く使われるか］

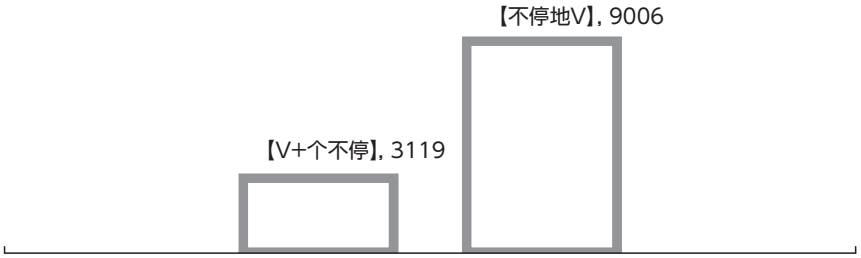
学習者の６人が「全くわからない」と答え、２人は「教科書などで【不停地Ｖ】を勉強したことがあるから、Ｂのほうが多いと思う」と回答した。母語話者は「Ａは話し言葉にしか使わないが、Ｂは書き言葉に使う堅い表現なので、ほぼ同じくらいか、Ｂのほうがすこし多いかと思う」と答えた。

以上【Ｖ+个不停】と【不停地Ｖ】について考察してきた。その特徴は次のようにまとめられる。

①【不停地Ｖ】は客観的な叙述であり、【V+ 个不停】は話し手の主観的な感情を表す。
②【不停地Ｖ】と比べ、【Ｖ+个不停】のほうが「臨場感」が感じられる。
③【Ｖ+个没完】は【Ｖ+个不停】より話し手の不満などのマイナス感情が感じられる。

２.２【Ｖ＋个不停】と【不停地Ｖ】についての使用実態

次に【Ｖ+个不停】と【不停地Ｖ】の使用回数について、「BCCコーパス」で考察したが、その結果は次の［図表６］のようにまとめる。



［図表 6］

上記に示したように、【不停地Ｖ】は【Ｖ+个不停】よりかなり多いことが明らかになった。

３．終わりに

以上【V_1+个+不／没+V_2】における V_1、V_2の使用実態、【V_1+个+不／没+V_2】の用い方の特徴及び【Ｖ+个不停】と【不停地Ｖ】の違いについて考察してきた。その特徴は次のようにまとめられる。

①V_1は持続の意味がない状態動詞、動作動詞が多い。
②V_2は“停”“住”“休”などのような「止まる」を表す。そのうち“不停”が最も多い。
③【不+V_2】でV_1の「状態の持続」「動作の繰り返し」を示し、「止まらない」という意味を表す。
④【不停地Ｖ】は客観的な叙述であり、【Ｖ+个不停】は話し手の主観的な感情を表す。
⑤【不停地Ｖ】と比べ、【Ｖ+个不停】のほうが「臨場感」が感じられる。
⑥【Ｖ+个没完】は【Ｖ+个不停】より話し手の不満などの感情が感じられる。

参考文献

（1）呂叔湘編集、牛島徳次翻訳、菱沼透翻訳（2003）『中国語文法用例辞典――「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』東方書店
（2）北京対外経済貿易大学 、小学館（2002）『中日辞典』小学館
（3）**中国社会科学院語言研究所詞典編集室**（2016）**『現代汉语词典**（第７版）**』商务印书馆**
（4）**李临定 主编**（2000）**『現代汉语实用标词类词典』山西教育出版社**
（5）劉月華、潘文娯など著（2001）『実用現代漢語語法　増訂本』**商务印书馆**
（6）劉子平（2013）『漢語量詞大詞典』上海辞書出版社
（7）香坂順一（2001）『現代中国語辞典』株式会社　光生館

（8）相原茂、荒川清秀、大川完三郎（2004）『東方中国語辞典』東方書店 + 北京・商務印書館
（9）王俊『現代漢語離合詞研究』（2018）東北師範大学出版社

例文の出典

（1）「中日対訳コーパス」（2003）第1版　北京日本学研究中心
（2）北京語言大学「中国語 BCC 语料库」（http://bcc.blcu.edu.cn）

日本語の会話における否定的評価について

向　蕊

要　旨

所谓“否定评价”是指，会话中的某一方所表达的语言，违背了特定基准或不符合另一方的价值观念时，另一方对其做出表达的语言行为。本文以“评价对象”为线索，把日语会话中的否定评价分为四个类型。分别为“对话题中提到的事实的否定评价”、“对对方的想法和做法的否定评价”、“对对方自谦、自嘲等的否定评价”、“对对方本人的否定评价”，并分析了各个类型的语言表现特征，说话人的心理特征，以及否定评价对会话的成立和展开起到的作用。这可以说是新的视角下的“谈话研究”，也希望能为日语学习者提供一个顺利进行日语交流的方法。

はじめに

人間はコミュニケーションを行う時、言葉や表情、ジェスチャーなどを使い、互いの感情や意思を伝達する。本稿は日本語の会話における「否定的評価」という側面に注目し、コミュニケーションの相手にマイナス的な感情や情報を伝える際の日本語の特徴を分析しようとする。

「評価」というのは物事に対して話し手の主張を表すことである[1)]。「否定的評価」については、「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現すること」と林（2015）[2)]が定義している。

否定的評価についての研究は、現時点において、「否定的評価とは何か」、「どんな表現が使われているか」などの研究にとどまっている。本研究では、「評価の対象」に焦点を当て、「否定的評価」が使われる会話の場面を分析し、その使用は、発話者と相手の心理にどのように働きかけているのか、会話の成立や展開にどのように機能するのかといった問題を明らかにしようとする。また、「否定的評価」のマーカーとして、どんな表現が使われているか、さらに、配慮表現[3)]の使用などの特徴も見出したい。

1. 先行研究

山路（2006）[4)]は、「ほめ」や「けなし」のような〈相手を評価する発話〉を「発話意図（親和的意図か攻撃的意図か）」「伝達内容（実際に伝えようといている評価が肯定的か否定的か）」「発話内容（形式上の評価が肯定的か否定的の3つの軸で整理している。

本稿では、山路（2006）が論じた「発話意図」（語用的機能）と「発話内容」（言語的表現）を中心に分析する。

また、関崎（2011）[5]は、否定的評価の抽出の手がかりとして、以下のような観点を挙げている。

- 該当発話文が否定的評価の語彙表現を含んでいるのか。
- 実質的に否定的に評価する態度が認められるのか。

そして、関崎（2010）[6]によると、「明示的否定的評価」は否定的評価の意味を持った語彙・表現、「～なくてもいい」などの評価のモダリティの表現、否定形（否定の助動詞「ない」を用いて相手の発話内容を否定するもの、命令形、禁止形、「～んじゃない」という文型）である。「明示的ではない否定的評価」の発話は、上記の語彙、表現を含んではいないが、実際には相手を批判、非難、注意など機能や相手に同意しない機能を持った発話である。

また、「明示的ではない否定的評価」の表現方法には、「感情の表明」、「話し手自身の状況を述べる」、「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」、「否定的に捉えた行為の言語化」、「明示的な表現の繰返しを避ける」、「疑問詞での言い換え」、「例え話」の７つがあると主張する。

関崎（2010）が論じた「明示的ではない否定的評価」の表現方法は、「否定的評価」を抽出する文脈的な基準をほぼカバーできていると筆者は考える。それゆえ、本稿では、関崎（2010）の理論を利用して「明示的ではない否定的評価」を抽出することにする。

2. 評価の対象を基準にした分類

筆者はＢＴＳＪ日本語自然会話コーパス（2018年版）[7]とテレビ番組「モニタリング」[8]より、「否定に関する事例」42例を抽出した。そして、これらの事例を分析し、否定する対象の性格によって分類をしてみた。表１で示したとおり、類Ⅰは相手の話に出る事実関係に対する否定、類Ⅱは相手の考え方、やり方に対する否定、類Ⅲは相手の謙遜や自嘲の言葉に対する否定、類Ⅳは相手本人に対する否定である。

次に談話データと番組データを分析しながら、各種類の特徴を見ていくことにする。

表１

	否定の対象
類Ⅰ	相手の話に出る事実関係に対する否定
類Ⅱ	相手の考え方、やり方に対する否定
類Ⅲ	相手の謙遜や自嘲の言葉に対する否定
類Ⅳ	相手本人に対する否定

2.1　事実関係に対する否定

まず、次の会話例を見てよう。

例１　A　きのうあれ聞いたよ、中国語会話 =。
A　= 月曜日だっけ ??。
B　うっそ。
A　時間は変わってて „
B　〈あー〉{〈}。
A　〈『あい〉{〉} のり』とかぶってんの。
B　はいはいはい。
B　水曜日でしょう ?。
A　違う =。
A　= だから月曜日の 11時からになったの。

この会話では、まず発話者 A は中国語会話の開始時間について、発話者 B に確認する。結局、B が思っている時間は変更前のものであり、「水曜日でしょう ?」と A に言うと、A から「違う」という答えが返ってくる。

ここで、A の発話「違う」は、B の話に出ている「水曜日」についての否定であり、つまり、「中国語会話の時間は水曜日ではなく、別の時間である」ことを強調しているのである。この場合、発話者の否定しようとする対象は、相手の話の中に出てくる物事であり、客観的に事実関係を述べている。すなわち、発話者は相手に対して、主観的な感情をもっておらず、事実関係を客観的に伝達しようとしているわけである。

例２　A　右翼とか左翼とかやだよね。
B　〈軽い笑い〉それは違うけど。
A　右翼、右翼、とかいう？〈笑い〉[平板化させている]。
B　〈笑い〉。
A　右翼、左翼っていう [平板化させている]。
A　右翼じゃなくって、右翼って [２番目は平板化で発音]。
B　右翼 [平板化させて]。
A　〈笑い〉よくわかんないけど。

例２は「うよく」と「さよく」のアクセントをめぐって展開された会話になっている。B は A のアクセントが間違っているものと認識していて、単刀直入に「それは違うけど」という形で、A の間違いを指摘した。

ここで、Bの「それは違うけど」という発話はAの読み方に対しての評価であり、A本人及びそのやり方、考え方に対する評価ではない。そして、Bが否定的評価を下すという行為は客観的事実を述べているだけで、自分の主観的感情は含まれない。これはA及びAの行為を否定するわけではなく、会話に出てくる話題の間違っている部分を対象にしている発話である。

以上、「否定的評価」の類Ⅰについて二つの例をあげて分析した。これらの分析を通して、このパターンの「否定的評価」は、相手の本人及び相手のやり方、考え方に対して否定的評価を与えるものではなく、事実関係に基づき、相手の話の事実と異なる部分を指摘するものだとわかった。

発話者にとって、これは客観的な判断であるため、表現方法として相手に配慮する表現の使用は比較的少ないと言える。そのかわり、用いられる表現は「ではない」、「違う」、「そうではない」、「そういうことではない」など直接な言い方が多く見られる。

2.2　相手の考え方、やり方に対する否定

下記の例を見てみよう。

例3　A　〈ネイ〉ティブで内省を使ったってことなんだけど=。
　　B　内省法ですね。
　　A　うん。
　　B　うん、ま、あれ。
　　A　それからじゃ、あの（ええ）、これだけじゃ、こ、こあ、あの、この、あのーグラフだけじゃあ、あのー、何ていうか、面白みがないよ。でも多次元的になるわけでしょう、あのもっと様々なフィルターを

A（先生）はB（学生）の原稿を見て、「グラフだけじゃあ、あのー、何ていうか、面白みがないよ。」という指摘をする。「面白みがないよ」という真正面からの否定は、いっけん、遠慮のない言い方に聞こえてしまう。ただし、ここの「面白みがないよ」はBが書いた原稿を対象に評価しているもので、グラフだけを作ったBの書き方についての否定的評価である。評価の対象は相手本人ではなく、その人のやり方や考え方に限っているので、相手を傷づけることもなく、納得のいく評価だと思われる。こういう場合、発話者は否定する対象の範囲を明確に指定したり、相手本人への指摘ではないことを強調したりする必要がある。そして、「否定的評価」に続いて、Aは「でも多次元的になるわけでしょう、あのもっと様々なフィルターを」という形でフォローを入れている。これも、類Ⅱの特徴の一つと言える。

2.1で見てきたとおり、類Ⅰでは、「ではない」「違う」のような直接な否定表現が多用さ

れる。これに対して、類Ⅱも比較的直接な表現であるが、評価対象のある側面について（この例では「面白み」）具体的に指摘する表現を使い、その後のフォローの表現も見られる。

もう一例を見てみよう。

例４Ａ　だけど、多分「会社名２」で私が一生やっていくとか、少なくとも数年間？（うん）数年間っていうか、会社に貢献できたり、できるように？（うん）力をつけてから仕事をしてく気が多分ないから
Ｂ　うん、〈でもさ〉„
Ａ　〈それ〉{〉}{ だったら〈笑いながら〉失礼と思って。
Ｂ　いや、それ、そこまでは考えなくてもいいと思うけど。

ここで、ＡとＢは「仕事の目的は何か？」という話題を展開している。ＡとＢの見方は異なるなか、ＢはＡの見方に対して、「いや、それ、そこまでは考えなくてもいいと思うけど」という否定的な評価をした。

ここでも、Ｂが下した否定的評価の対象は、「仕事は会社に貢献すること」というＡの考え方であり、Ａ本人への評価ではない。

対話コーパスから抽出した用例から見ると、このパターンのマーカーとして、「じゃないか」「言えばいいわけなんだけど」「でも」「っていうわけじゃないんだけど…」などの表現が見られる。これらの表現は、相手が自分の意見を受け入れやすいように、発話の目的を明瞭にさせ、また、相手に強烈に否定されているという感じをさせないように、クッションの役割も果たしている。

2.３　相手の謙遜や自嘲の言葉に対する否定

この節では、会話者同士の人間関係を円滑にさせるための否定表現の使用について分析してみたい。

例５　Ａ　なん、何だかんだ言って、うちらももうね、4年だもんね。
Ｂ　早ーい。ね。
Ａ　何してたっけ。
Ｂ　〈笑い〉わかんない〈笑いながら〉。
Ａ　合宿で毎回爆笑してたのぐらいしか覚えてないんだけど
Ｂ　「Ａあだ名」もあほじゃん〈笑いながら〉。
Ａ　うっせーよ［この間、Ｂは笑っている］。
Ａ　今ごろ気づいてんじゃねーよ〈大きな笑い〉

対話者の二人は同級生の関係で、合宿の生活をめぐって昔の思い出を話し合う。そこで、Aによる「うっせーよ」という発話は、一見Bの発言に対する反発、否定のように思われる。ただし、ここでは二人の会話は「Aはあほであるかどうか」ということに焦点を当てているわけではなく、その目的は二人の若いときの無邪気さや楽しさを思い出しあいながら、懐かしい気持ちを共有しようとすることにあるだろう。したがって、ここの「うっせーよ」は反論の形を取りながらも、相手の話題にのり、会話をスムーズに進めていけるように潤滑油のような働きをしていると言えよう。

例6　A　「学科名1」、4年の、「Aフルネーム」と申します。
　　B　あ。
　　A　すいません、老けてて。
　　B　<u>え、そんなことはないです＜笑いながら＞。</u>

これは初対面の人どうしで自己紹介をしているの場面である。Aは「4年」だと自己紹介をすると、Bは思わず「あ」と驚きの声を出す。AはBの声に反応して、「すいません、老けてて」と自嘲する。Bは「そんなことはないです」でAの自嘲的発話について否定をする。

会話を順調に展開させるために、聞き手は話し手の発話に沿って、適当に肯定や否定などの反応をする必要がある。とくに、例6の場面のように、相手が謙遜や自嘲の話をする場合、相手に褒められる場合などは、会話者の関係に齟齬が出ないように、「否定的」な表現で対応することが必要である。これは、いわゆる「対人関係の円滑を保つための否定」である。

以上の二例を見ると、「相手の謙遜や自嘲の言葉に対する否定」は否定の形式を利用して、積極的に話す意欲を表し、会話がうまく進むことができるように機能するものである。

対話コーパスから抽出したこのパターンの用例には、「え、そんなことはないです」「いや、あんまり…」「それは嘘だよ」「へー、いいじゃない」「いや、ねえけどな、別に」などの表現が見られた。表現マーカーとして、比較的に配慮した言い方が多いと言える。

2.4　相手本人に対する否定

上で述べてきた否定の3パターンと違って、類Ⅳの「否定的評価」は会話の相手や話題に出てくる人物に対する「否定」で、人間の性格ないし人格の欠点を指摘するものである。それゆえ、このパターンの「否定」は日常会話に登場する頻度は比較的に少なく、特定の場面にしか見ることができない「否定」である。ここで、テレビ番組から抽出した会話の実例を使って、このパターンの特徴を分析していく。

例７　妻　浮気はしてませんか？
　　夫　一般常識で浮気と言われるようなことをしている時間はないです。僕は...
　　妻　あるじゃん。
　　夫　時間はない！
　　妻　芸能界の仕事は... してない。
　　夫　芸能界の仕事があるないじゃなくて、時間はない、ずっと書をやってるじゃない。家でもやってるし、先生のところでもやってるし。その前に携帯を見た事はよくないでしょう？
　　妻　また言う？ 小っちゃい男だね。

まず、上の会話の背景を紹介しておく。番組の設定は「夫の携帯に見知らぬ女から電話が入ってきたら、妻がどういう反応をするのか」を観察するということになっている。案の定、奥さんは「浮気」の事実の有無をめぐって繰り返し夫に問いかける。そして詰問されて言い訳を続ける夫に、奥さんは不満がたまる一方で、とうとう、夫の「携帯を見た事はよくないでしょう？」という反撃の一言に、夫の人格に対して攻撃することにした。「小っちゃい男だね。」という「否定的評価」である。

この例のように、類Ⅳの「否定的評価」は争論や喧嘩などの場面に登場することが多くなっているが、次の例は状況が違ってくる。

例８　おたけ　オレだってオレはマジであなたが来るまでシンプルに一日署長で気持ちよかったんすよ
　　スタッフ　ジャンポケ３人じゃなくて１人なんですよ
　　おたけ　オレ、1人なのよ。今日！
　　小　宮　いや、身の丈を知れよう！ そりゃそうだろう！ それ疑えよ！
　　おたけ　オレはとうとう時代が来たなって思って

番組で一日署長を体験したおたけは自分の仕事の完成度にかなり満足しているらしい。ここで小宮はおたけの有頂天な様子に対してむかつき、「いや、身の丈を知れよう！」とからかう。

「身の丈を知れよう」は慣用語で、呼びかけの形をとるが、実際のところ、「この人は身の丈の知らない、ずうずうしい人だ」という「否定的」表現の変形である。これもきつい言葉だが、この場合、発話者は本気で喧嘩を売っているものではなく、親しい間柄の人どうしの冗談であると双方に認識されているので、和やかな雰囲気を保つことが可能である。

上記二つの例から分かるように、類Ⅳの「否定的評価」は、人間の性格や人格の欠陥について指摘するものであり、喧嘩や冗談など特定な場面に登場する。表現形式として、貶

し言葉や皮肉などが使われ、発話者の口調や態度によって、激しい衝突を引き起こしたり、雰囲気を和ませたりすることができる。

3. まとめ

本稿では、「否定的評価」を四種類に分けた。類Ⅰ～類Ⅳはどのような特徴があるか、次の表２でまとめる。

表2

	否定の対象	言語の特徴	発話者の感情と意図
類Ⅰ	事実関係	直接的な表現が多く使われる	主観的な感情をもっておらず、事実関係を客観的に伝達する
類Ⅱ	相手の考え方、やり方	フォローやクッションになる表現が使われる	相手を傷づけないことを前提に、具体的に指摘する
類Ⅲ	相手の謙遜や自嘲の言葉	直接的な表現だが、角の立たないように話す	相手が謙遜や自嘲の話や自分を褒める場合、雰囲気を和ませ、会話がスムーズに進ませる
類Ⅳ	相手本人	貶し言葉や皮肉などの言葉が多く見られる	喧嘩や冗談など特定な場面で衝突を引き起こしたり、雰囲気を和ませたりする

今までの「否定的評価」の研究は、ほぼ言語の表現形式の角度から述べられてきた。本稿は、「否定の対象」を基準に新たな分類を試みた。そして、各種類の言語の特徴、発話者の感情と意図の視点を考察した。今後は、日常会話を録音して、生のデータを収集、分析し、特に発話者同士の上下関係と親疎関係による会話の相違を明らかにしたいと思う。

注と参考文献

(1) 関崎博紀　2010 「日本人同士の会話における否定的評価の表現を含む発話の機能」『日本語用論学会第12回大会発表論文集』 p. 273-276, 2010-01

(2) 林始恩　2015『親和的関係における否定的評価の研究：日韓母語話者の言語行動の比較』筑波大学博士論文

(3) 山岡政紀 2010『コミュニケーションと配慮表現――日本語語用論入門――』 明治書院

(4) 山路奈保子 2006 「日本語の「ほめ」についての一考察――「ほめ」を攻撃的に作用される要因の分析」『日本語教育』130, pp. 100-109, 日本語教育学会

(5) 関崎博紀　2011 「会話に見られる否定的評価にかかる語用上の制約――評価の対象の分析を通して――」『日中言語研究と日本語教育』第４号, pp. 58-67　好文出版

(6) 関崎博紀　2010 「明示的ではない否定的評価の表現方法――日本人大学生同士の会話資料から――」 国際日本研究 /2/　p.117-137, 2010-01

(7) 宇佐美まゆみ監修（2018）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版』

(8) TBSテレビ番組『ニンゲン観察バラエティ　モニタリング』

執筆者紹介

新谷　遥　京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻（実践言語教育コース）
日本語教育領域

賀　喜　京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻（言語文化コース）
東アジア地域

付　汝青　京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻（言語文化コース）
東アジア地域

馮　一峰　京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻（言語文化コース）
東アジア地域

吉野 孝介　京都外国語大学大学院 博士後期課程 異言語・文化専攻 言語文化領域

向　蕊　京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻（言語文化コース）
東アジア地域

編集代表

彭　飛

（京都外国語大学　大学院外国語研究科長　日本語学科教授）

編集委員会

賀　喜

（京都外国語大学大学院　博士前期課程　異言語・文化専攻（言語文化コース）東アジア地域）

蘇　俊尧

（京都外国語大学大学院　博士前期課程　異言語・文化専攻（言語文化コース）東アジア地域）

編集後記

2007年創刊以来、大学院紀要『言語と文化』は第14号を迎えました。これもひとえに本紀要の意義に賛同される関係各位のご助力に拠るものと感謝いたします。本書は大学院生主体の媒体誌であるため、編集に際して不慣れなことも多く戸惑いもありましたが、今号は６件の論文を掲載することとなりました。日本語教育、日中対照言語学、統語論、社会言語学のコミュニケーションなど様々な研究分野が収められ、本学の研究側面が一層充実しました。

まだまだ改善すべき点もありますが、反省点は次号刊行における課題として反映させたいと考えております。

本号刊行にあたり、投稿された大学院生、査読等のご指導をくださいました先生方、編集作業や印刷・製本において細かなご指導をくださった方々に心より感謝申しあげます。

また、本紀要『言語と文化』が、より多くの方にご覧いただけることを心より願っております。

（賀　喜／蘇 俊尭）

『言語と文化』原稿執筆要項

1．執筆資格

本学在籍中の大学院生、および編集委員会が認めたものとする。

2．原稿の種類

論文、研究ノート、書評、翻訳およびその他、編集委員会が認めたものとする。

3．原稿の枚数

論文は38字×32行を1ページとして以下の分量を目安とする。

1）論文：約12,000字（A4で10頁程度、上限はA4で14頁とする）。
研究ノート：約8,000字（A4で7頁程度、上限はA4で8頁とする）。
翻訳：約12,000字（A4で10頁程度、上限はA4で10頁とする）。
書評：約2,000～2,800字（A4で1～2頁程度、上限はA4で2頁とする）。

2）欧文原稿の目安は論文10頁5,000語程度、研究ノート7頁3,000語程度とする。

3）論文の初めに要旨をつけること。要旨の分量は日本語・中国語の場合は800字まで、その他の欧米語の場合は1,600字までとする。また、タイトルは、目次ページに記載する際使用言語に関わらず欧文和文両方を必要とする。

4）要旨と図表などは上記1）の枚数に含まれるものとする。

4．執筆の手続き

- 2020年7月23日(木)までに執筆申込書を編集委員会宛に提出する。執筆申込なしに送付された原稿は受理されない。ただし、執筆者が海外在住の場合、執筆者が指導教官に申込書を提出し、指導教官が申込書を提出してもよい。
- 2020年10月25日(日)までに執筆者は担当教官に原稿を予備提出し、指導を受けておく。
- 2020年11月8日(日)までに編集委員会に完成原稿を提出する。

5．原稿の作成と提出

原稿は、編集委員指定の本要項を参照して作成し、表記等の校正作業については編集委員会に一任していただく。プリントアウトした原稿を1部とデータの書き込まれたメディアを提出する。データはメール送信（g_bunka@kufs.ac.jp）または郵送も可。

データの郵送先：〒615-8558　京都市右京区西院笠目町6
京都外国語大学大学院外国語学研究科『言語と文化』編集委員会
原稿は完全原稿を提出すること。締切日を過ぎた原稿は受け付けない。

6．校正

執筆者校正は原則として2回までとし、文章の大幅な加筆・修正は認めない。

7．原稿の採否

編集委員会によって決定される。

8．原稿の掲載

当該号の投稿論文数、その他の事情により、次号に繰り越す場合がある。
その場合、編集委員会は投稿者に連絡し、協議するものとする。

9．執筆申込先および原稿送付先

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6　京都外国語大学大学院事務室
『言語と文化』編集委員会　e-mail: g_bunka@kufs.ac.jp

10. その他

必要な事項については、編集委員会の議を経て決定する。

11. 著作権について

掲載原稿の著作権は、著者に帰属する。ただし、編集委員会は、掲載原稿を電子化し、公開・配布するための権利を有するものとする。

京都外国語大学『言語と文化』第14号

2020年3月15日　印刷
2020年3月15日　発行

編集兼　京都外国語大学大学院外国語学研究科
発行所　〒615-8558　京都市右京区西院笠目町6